



第7回ESD大賞 受賞校実践集

主 催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

後 援：文部科学省 / 日本ユネスコ国内委員会 / 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 / 株式会社教育新聞社

はじめに

Education for Sustainable Development (ESD) は、「持続可能な社会の担い手を育む」教育とされています。

地球上の様々な課題を、自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人材を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育です。

NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、このESDの理念に基づく取組を積極的に実践する学校を奨励する「ESD大賞」を平成22年度に創設いたしました。

本事業は、全国のESDの優れた実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与することを目指しております。

7回目となる今年は、全国の小・中・高等学校43校よりご応募をいただきました。

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではございましたが、第7回ESD大賞として、ここに受賞校を発表し、その実践をまとめさせていただきました。

なお第7回ESD大賞は、カシオ計算機株式会社様、ネスレ日本株式会社様よりご協力をいただきました。

本冊子が少しでもESD実践の参考・発展へつながり、持続可能な社会の担い手づくりに寄与できれば幸いです。

目 次

◆はじめに	1
◆審査にあたって	3
◆講評	4
◆文部科学大臣賞	
岡山県立和気閑谷高等学校	5
◆ユネスコスクール最優秀賞	
宮城県気仙沼市立唐桑小学校	10
◆小学校賞	
岡山県岡山市立第三藤田小学校	15
◆中学校賞	
東京都多摩市立東愛宕中学校	20
◆高等学校賞	
渋谷教育学園渋谷中学高等学校	25
◆審査委員特別賞	
群馬県立利根実業高等学校	29
◆ネスレ日本ヘルシーキッズ賞	
宮城県気仙沼市立面瀬小学校	34
◆企業の社会貢献活動事例	
ネスレ日本株式会社	39

【審査にあたって】

第7回ESD大賞の審査にあたっては、ESDの目標である「持続可能な社会づくりにかかわる課題を見出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うこと」に基づき、この目標の実現に向けた実践が、学校として組織的・計画的・継続的に行われているかについて評価しました。

また昨年度に引き続き、企業特別賞である「ネスレ日本ヘルシーキッズ賞」を設定しました。本賞では、ESD大賞の審査基準を満たした小学校の事例のうち、特に次の4つの観点から、子どもの意識・行動変容につながっている優れた事例に対して、賞を贈ります。

- ① 「からだづくり」に前向きな子どもを育てている
- ② 仲間と共に行動することで喜びや楽しさを分かち合うことができる
- ③ 「社会性」や「対人関係能力」、「他者への思いやり」を育てる
- ④ 子どもの自尊感情、自己肯定感を高める

本賞は、「自分のからだは自分でつくる」をコンセプトに、次世代を担う子どもの健康づくりをサポートするネスレ日本株式会社の特別協賛により設定されています。

なお、賞から外れた学校にも優れた取組が多くありました。各学校におきましては今後一層精進され、ESDの発展・充実に向けた取組となることを期待しています。

文部科学大臣賞 … 岡山県立和気閑谷高等学校

論語の「恕」(思いやりの意味)の精神を拠り所として、生徒の多様な主体性を尊重する教育活動と海外研修の体験を関連付け、思いやりの心と国際感覚を育み、自分と地域、地球の課題を結び付けて取り組むことのできるグローバル人材育成のプログラムの開発を行っている。豊かな地域の教育資源を十分に活用し、学校を核として地域を創生するESDの取組が高く評価された。

ユネスコスクール最優秀賞 … 宮城県気仙沼市立唐桑小学校

ねらいは、カキ養殖を中心とした地域の自然環境を活用し、唐桑の海の豊かさと人とのつながりを実感し、ふるさと唐桑が今後も持続発展していくことができるよう、探求心と実践力を養うこととしている。学年の発達に対応したねらいと活動が地域と連携して計画的・継続的に行われ、児童一人ひとりに豊かな将来の唐桑を願う郷土愛と実践力が育まれている。ESDの理念に基づいた学校をあげての取組が評価された。

小学校賞 … 岡山県岡山市立第三藤田小学校

テーマは「いのちの学習」。ねらいは「様々なつながりの中から、自分を見つめ直し、自分の生き方を考えていく子を育てる」としている。人・社会・自然など現代社会の課題を追求するための単元を特設しており、児童一人ひとりが自己の成長を自覚することができるように、また教師も児童それぞれの学力や心の変容をとらえることができるようになった。さらに取組は中学校区に波及し、学校同士が連携してESDに取り組み始めている点も評価された。

中学校賞 … 東京都多摩市立東愛宕中学校

学校の近隣地域が、昼間は「高齢者」と「子供」の町であることから、中学生が中心となって地域再生に取り組むことをテーマにしている。全生徒が認知症サポーターの資格を取得し、老人会と協力して防災マップを作成するなど、地域貢献への活動に積極的に参加している。地域に対してESDの提言から、中学生が核となつての地域再生への新たな取組が始まっている点が評価された。

高等学校賞 … 渋谷教育学園渋谷中学高等学校

主な活動として、高1、2学年では高齢化・少子化・女性の社会進出、子供の人權、水不足、再生可能エネルギーなどの課題に教科横断型のアクティブラーニング授業を行い、その学びの成果を英語で発信している。また高2では、授業で学んだことを活用し高校生にできることは何か、自分で考え、行動する活動を行っている。生徒が、社会的課題について自分なりの考えを持ち、深い議論も英語で行えるようになり、社会参画の意識が高まったことなどが評価された。

審査委員特別賞 … 群馬県立利根実業高等学校

ねらいを「地域に根差した特色ある実業高校の創造」とし、環境教育活動、食育活動、地域ボランティア活動を柱に取り組んでいる。具体的には、野生動物の行動調査、市のコミュニティーガーデン設営、地産品を活用した商品開発や地元小学校の児童への米栽培指導などが挙げられる。これらの活動を通して学校と地域との連携が深まったこと、生徒一人ひとりが達成感・充実感を持つようになったことなどが評価された。

ネスレ日本ヘルシーキッズ賞 … 宮城県気仙沼市立面瀬小学校

地域の基幹産業である「水産業」と「魚食」にフォーカスし、ネスレヘルシーキッズプログラムを活用しながら、地域の水産物や漁の方法を調査したり、ワカメ養殖などの体験活動にも取り組む。「海洋教育こどもサミット」などで、海や資源を守るために自分たちができることについて発表する機会も設けている。豊かな海の恵みにより地域文化や生活が支えられてきたこと、魚の栄養や価値に気づくようになったことなどを成果としており、本賞の評価基準にかなった実践として受賞した。

「恕」の精神を備えたグローバル人材育成プログラム

1 はじめに

岡山県立和気閑谷高等学校は、県東部の和気町にある唯一の公立高校で、周りを緑に囲まれた静かな環境にあり、普通科(1学年2クラス)とキャリア探求科(同1クラス)の2学科を設置している。1670(寛文10)年に備前藩主池田光政公が設立した日本最古の庶民の学校「閑谷学校」を源流とし、今年で創学347年を迎える。

閑谷学校で行われる釈菜(せきさい:孔子を祀る儀式)では本校の教職員が祭官を務め、生徒は受付や接待を担当し、代表生徒が参列するなど、閑谷学校の歴史と伝統を継承している。

全校集会では体育館でオリジナルテキスト『論語百章』を用いて論語朗読を行っている。また、独自のスケジュール帳である論語手帳『恕』の週ごとのページに掲げられている『今週の論語』を毎朝のSHRで朗読している。このように論語に日常的に接し生活の鑑とすることで「仁」「恕」の心を育み、自己指導能力の育成を図っている。



▲本校教職員が祭官を務める釈菜

▲体育館での論語朗読

2 実践の経緯とねらい

本校はこれまで、論語による道徳性と、総合的な学習の時間を中心とした地域での課題解決学習を含むアクティブラーニングとを軸に、地域と自分の関わりの中で地域に貢献し将来の夢・志を創造する人材育成に取り組んできたが、教育をめぐる社会情勢から、今後求められる人材を、

①様々な分野で主体的に活躍できる、②地元地域を愛し地域創生を担う、③困難な課題にも粘り強く取り組む、④積極的にコミュニティづくりに参画する、と位置付けた。一方、教育の町「和気」構想には英語力育成に向けた異校種間連携・地域連携が盛り込まれており、本校魅力化推進協議会における2020年に向けた本校の構想に関する協議でも国際感覚の涵養が必要と指摘された。

これらを受けて、論語を基盤として多様な主体との連携と海外でのフィールドワークをあわせることで、心豊かな精神と国際感覚を有し、自分と地域と地球の課題や関係性を結びつけて考え実践できる人材を育成するプログラムの研究開発を進めることにした。さらに、生徒の変容を見取る評価方法として、参加型評価の教育現場への導入についても研究することとした。

3 実践内容

国際理解を深め論語を基盤とした協働的な活動を通して、多文化協働力、探究学習力、社会的行動力の育成を目標に、①小中高連携国際理解講座、②国際交流、③地域と連携した課題解決学習、④評価研究、を軸に展開した。同時に、持続可能な実践事例として中山間地域における国際理解学習のモデルになることをめざした。

3.1 小中高連携国際理解講座

(1) こくさいフォーラム in Wake

小中高生合同で、あるいは地域の方も交え定期的にフォーラムを開催した。各回、20~30名が参加しESDの観点から学習を展開した。

- ・第1回：留学生と交流～和気町フォトラリー～
実施日 5月29日
場所 エンター和気、和気町内各所

留学生からの母国文化紹介の後、グループに分かれ写真を撮りながら町内を巡った。グループ内で英語を用いて説明や質問をし、コミュニケーションを図った。写真を元にグループごとに町内マップを作成し、発表と意見交換を行った。



・第2回：SDGsをゲームで体験し2030年の世界を考える

実施日 6月12日

場所 和気閑谷高校 会議室

ESDおよびSDGsについての基礎を学習した後、稲村健夫氏（Game Change Labo）を講師にシミュレーションゲーム「2030 SDGs」を体験し2030年の未来を考えた。



参加者アンケート「SDGsの17目標の中で関心のあるものは？」では、上位から、貧困、教育、不平等という結果になった。

・第3回：世界の教育の現状を考える

実施日 7月17日

場所 和気閑谷高校 キャリア教室

英語研究部の生徒が英語によるアイスブレイクを行い、会を始めた。第2回の結果を受け「貧困と教育」をテーマに学習することにした。貧困と教育の現状をクイズ形式で考え、マララ・ユスフ

ザイさんの国連スピーチを動画で見て、意見交換した。「読み書きができない→安定した職業につけない→収入が少ない→教育を受けられない→読み書きができない→…」、この連鎖を教育の力で止めよう！という結論を参加者で導いた。

・第4回：コトバが無いとどうなる？

実施日 9月25日

場所 和気閑谷高校 キャリア教室

算数クイズ、英語によるワークショップ「Paper Tower」、カードゲーム「バーンガ」を通して、相手を思いやるコミュニケーションの大切さを体験した。生徒の感想には、「異文化体験は身近なところでも起こりうる。例えば、新しいクラスになったとき、進学や就職で新しい土地へ行ったとき。そんなときどう行動するか。」のように、自分事として捉える内容が見られるようになった。

・第5回：留学生と交流～世界の食文化～

実施日 10月23日

場所 和気閑谷高校 キャリア教室

英語によるアイスブレイクの後、留学生から母国の食文化に関する紹介を受けた。ワークショップは「海外版お弁当作り」。身近でも違いの大きい「食」を媒体として、自分の殻を破ってコミュニケーションを深めることをめざした。グループに分かれ、食のタブー、食文化やライフスタイルなどを留学生にインタビューしながら、5W1Hでストーリーを語れるお弁当を描き、発表した。

・第6回：2030年の理想の和気町を描こう

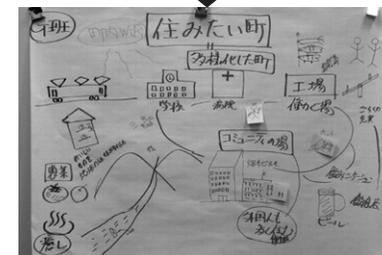
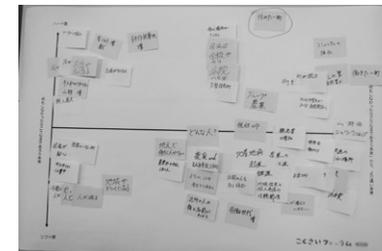
実施日 11月26日

場所 和気商工会 大会議室



人口減少社会における協働のあり方を地域の方を含む50名の参加者で考えた。浦崎太郎氏（岐阜県立可児高等学校）の基調講演では「中高生の今と和気町の2030年は直結している」「高校と地域が協働すべき必要性・必然性」を提示していただいた。高校生2人が探究学習で研究している「感染症」「地域経済」について発表した後、未来を考えるワークショップを行った。グループに分かれSDGsの17目標から1つを選び「何も対策をしなかったらこうなるだろう未来」をハード面とソフト面から予想した。次に「そこから遠い未来とそのために必要なこと」を付箋に書き出し、2030年の姿を定め、さらにそこを起点として関連する分野に繋げた。

まとめ方は、2015年12月にACCUで行われたワークショップを参考にした。地域社会を巻き込んだ価値観や行動、ライフスタイルの変容を通して持続可能な社会形成をめざすことを考えると、共通なイメージを与えてくれるものがあればよいと考え、「絵」に描くことにした。



参加者からは、「普段関わらない人たちの意見を聞いて新たな視点に気付くことができた。このように若い人からベテランの方まで、幅広い年齢の方が集まり話し合う場が継続して開催されるとよいと思う。」「高校生だけでは出なかった意見が多く出て、とてもびっくりした。そういった意見を聞いて、いろんなことを考えることができ、とても楽しく感じた。この貴重な体験を探究学習以外

にも活かしていきたい。」と、多様な主体の協働、学習と行動の連携などについて新たな動きを感じさせる内容が多く出された。

(2) English Camp

実施日 夏キャンプ 8月27～28日

冬キャンプ 12月27～28日

場所 岡山県青少年教育センター閑谷学校

参加者 夏70名、冬53名

「小中学生に最高の思い出を！」を目標に、小中学生が英語に親しめるようなプログラムを高校生が開発・実践する。和気町教育委員会社会教育課と共催で、県内留学生とALTを講師に招き実施している。

小中学生のアンケートでは、

1) 満足度を100点満点で表すと…86.5点

2) 来年も来たい…97.5%

3) 楽しかったこと（複数回答）

高校生の英語ゲーム…77.3%

高校生企画野外アクティビティ…68.2%

外国の方の文化紹介と質問…59.1%

と、当初の目標は達成できていると言える。「外国の人に積極的に話すのに挑戦できた。」「最初は英語が不安だったけど高校生に教えてもらって楽しく過ごせた。」などの感想から、これからも英語や外国の文化への興味を広げ「英語が好き」という理由での参加に繋がることを期待している。

また、高校生も、「外国の方や小中学生に自分から話しかける「挑戦」していく力をつけられた。人前に立つての発表や説明などの大変さや難しさを学ぶことができ、今後の自分に役に立つと思う。」など、成長の跡が伺えた。



▲キャンプの様子は<http://bit.ly/2gR6e6k> で公開

3.2 国際交流

(1) 韓国ASPnet校訪問交流

日程 9月29日～10月1日

訪問先 韓国沃川（Okcheon）高校

訪問団 生徒4名、引率3名

論語の「仁」「恕」の精神が現地の価値観とどのような関係性があるかを交流のテーマの一つとし、訪問団の選考は、[1次] 全校生徒対象の論語に関する作文審査、[2次] 作文審査上位者対象の面接審査、で行った。

沃川高校では、日本語クラスの授業に参加した。自己紹介についてのおで、グループに加わり名刺交換をしながら自己紹介の練習に加わった。



また、ユネスコクラブの生徒と論語や学校生活についての意見交換を行った。沃川高校生徒による孔子や論語に関するプレゼンテーションは、短い準備期間にもかかわらず、内容だけでなく問いかげやちょっとしたパフォーマンスにも工夫が感じられる見事なもので、本校生徒は大きな刺激を受けた。

高校生同士が英語、日本語、韓国語を組み合わせ、お互いに知りたい、理解したい、繋がりたいという強いエネルギーを発している光景は「素晴らしい」一言に尽きる。沃川高校の生徒たちの尽きない好奇心と積極性に助けられ、充実した時間を過ごすことができた。一つ一つのことに深くなずき反応してくれる沃川高校の生徒たちのおかげで、何かを伝えるということの意味やあり方、受け手としての姿勢を学ぶことができた。同時に「コレを伝えたい！」というモノと熱い想いを日頃から育てておく必要性を感じた。

訪問の目的は、①日ごろの学習活動を通じて国を超えた若者同士がどのように学び合えるかを確かめ

合う、②UNESCOの理念を实践するASPnet校同士で平和の文化を交換し合う、③論語を基盤とした学び合いを通して参加者一人ひとりの成長及び文化の相互理解と深化をめざす、とした。交流の時間は短かったが、最初の訪問としては概ね目標達成できたと考える。今後は姉妹校協定を結び交流を継続する。



また本校は、中国上海市嘉定区第一中学、三東省曲阜市第一中学と友好交流協定を結んでおり、本校創学350年を迎える2020年には日韓中高校生ESDシンポジウムを開催したい。

(2) 中国上海市嘉定区サマーキャンプ派遣

日程 8月1日～9日

場所 上海市嘉定区各所

参加 生徒2名、引率1名

このキャンプは、和気町が友好都市協定を結ぶ嘉定区が主催し、9か国の高校生が集い国際感覚を養い相互理解と友好を深めるもので、和気町代表として本校から2名が参加した。孔子廟や博物館見学、中国伝統文化体験講習、ホスト高校生自宅での家庭体験などを通して、異文化に触れ交流を深めた。生徒にとっては初めての国や都市ばかりだったが、折り紙を披露したり自由時間も英語で話しかけたりして、積極的にコミュニケーションを取っていた。参加生徒は全校報告会で、①コミュニケーションを取るには恥ずかしがらずに積極的に話しかけていくこと、②他国へのイメージはニュースやインターネットの情報だけでは判断できないこと、③英語は自信がなくてもチャンスがあれば積極的に使うこと、を訴えた。



3.3 地域と連携した課題解決学習

地域の活性化が喫緊の課題である和気町、探究学習で学力・意欲の向上を含む学校魅力化をめざす本校。和気町唯一の高校の衰退は町の衰退につながるという共通の危機感から、協働による魅力化事業をスタートさせた。高校を核とした地域の活性化と地域の担い手育成をめざし、2014年度から総合的な学習の時間に地域と連携した課題解決学習を導入した。地域おこし協力隊が和気町支援職員として本校に常駐し、探究学習の企画立案や地域とのコーディネートを担うこととなった。

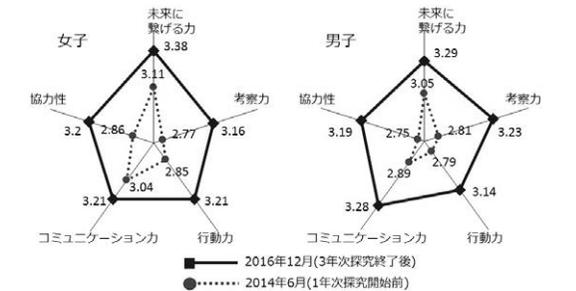
学んだことを地域で活用し実践から学ぶことで自己成長を図るサイクルの中で、3年間4単位のプログラムを組んでいる。

1年生（1単位） 普段関わっていることが、学問と結びついていることに気付く	○探究基礎Ⅰ「発見！和気町高校の新事実」 ○探究基礎Ⅱ「提案！和気の困りごと解決案」 ・探究学習の手順、有効な手法を学ぶ。 ・グループ活動を通して仲間への思いやりを身に付ける。
2年生（2単位） 身近な課題と世界のつながりを踏まえて探究する	○「いのち・こころ・くらし・ぶんか・しごと」の5分野から、進路希望に合わせてテーマを選択。 ・分野ごとに命題をおき、その解決策や提案内容を自分たちで考え探究する。 ・しごと分野はESD視点インターンシップを実施する。 ・修学旅行で進路希望別体験学習を実施する。
3年生（1単位） 学んできたことが未来にどう実現できるかを協働して探究する	○和気町をテーマに協働で探究する。 ・トレンドや課題を地域の方へのインタビュー等を通して探究する。 ・役場、学校、病院、デパートの4グループに再編し、「和気町を理想のまちに」を提案する。

町の中で体験し、調査し、町の方に教えてもらい、町の施設を活用し、あらゆる場面で町と関わって進めている。町、町教委、協力隊との打合せ会を週1回行うとともに、外部委員を招いての魅力化推進協議会を年5回開催している。

「町」と「県」立をこえての連携、地域を学習フィールドにする意義を町民の方々も理解してくださっている。高校に対する地域社会の認知も変わり、「頑張っている学校」「一緒に地域の課題を解決しようとしている学校」「頼れる学校」として協業の提案がされるようになってきている。例えば、和気町教委がスタートさせた小中学校放課後学習支援では、地域のボランティアの方と本校生徒と一緒に学習支援に当たっている。

探究学習を3年間経験した現3年生について、キャリア教育の観点で実施している意識調査を見ると、コミュニケーション力や協力する態度などESDが重視する能力・態度が向上していることが分かる。



(各分野に設問が8問ずつあり、4点満点で回答した平均値)

3.4 評価研究

教育現場におけるESDの学習評価実践として、MSC (Most Significant Change) をEnglish Camp参加者に実施した。MSCは事前の指標設定はせず、現場から集めた「重大な変化」から「最も重要な変化」を選択することで、意識や行動の変容などを明らかにする参加型評価手法である。

実施しての所感は、①学習者が評価に加わるので全員が高い興味関心を示しアクティブに参加、②指導者側の想いと生徒の学びが紐づけられ学びに対する生徒の納得感が高まる、③変化の質が評価及び評価を通じた学びの質に直結する、④組織の文化(大切にしたいこと)を浸透させるのに有効である。今後も、本校で活用が進んでいるOPPシート、こくさいフォーラムの実践から作成したポートフォリオをあわせ、学習者自身が自分の学びを実感し、自分の課題を見つけ、どのように学習を進めるかを自分で把握できる評価活動を研究していきたい。

4 まとめ

本校は2011年に、閑谷学校ガイドや学童保育などの生徒会主催ボランティア活動を軸とし「歴史、文化、伝統」をキーワードにユネスコスクールに認定された。その後、地域連携活動、探究学習、国際理解学習を組み込み、ESDを展開してきた。地域の教育文化資源を活用し、「仁」「恕」を基盤とした本校なりの新しい教育への挑戦と言える。ESDを通して、あるべき学習者の創造、指導者の教育観の転換に繋げることができるか、今後も検証を重ねながら進んでいきたい。

ユネスコスクール最優秀賞

宮城県気仙沼市立唐桑小学校
ESD担当 主幹教諭 畠山 政明

未来につなげよう！豊かな海を！

— カキ養殖体験活動を中心とした取組を通して —

1 はじめに

本校は明治6年創立の歴史と伝統のある学校であり、常に地域の拠点としての期待を背負って日々の教育活動に取り組んできた。子どもたちはまじめで純朴、熱心に働くというよさをもっている。地域の方々の学校に対する期待も高い。漁協青年部とは以前から、本校との関わりが深く、各種活動に多大な支援をいただいている。今年度、本校との連携した取組に対して、農林水産祭天皇杯賞を受賞した。このようなすばらしい地域の人たちとの関わりが本校の大きな財産である。また、唐桑はNPO法人「森は海の恋人」の活動拠点であり、カキ養殖に適した環境である。全校挙げてカキ養殖を中心とした海洋教育に取り組んでいる。

2 ねらい

カキ養殖を中心とした体験活動を通して、唐桑の海の豊かさと人との関わりやつながりを実感し、ふるさと唐桑が今後も持続可能な社会として発展していくことができるよう、探究しながら実践する力を養う。

3 目指す児童像（ゴールイメージ）

地域の豊かな自然や地域の人たちとの多様な交流を通して、豊かな心を持ち、ふるさと唐桑を愛する子ども

4 本校の取組の特色

- カキの養殖体験等の海洋教育を中心としている。
- 教科等との横断的な内容
- 多くの組織・団体と連携している。
- プログラムの開発・推進に地域が積極的に関わっている。

外部連携組織「学校支援委員会」

○ 学校支援委員会の構成

- 学校
- P T A
- 地域住民
- 県漁協唐桑支所青年部
- 公民館
- 海友会（船乗りOB）

○ 協力団体

- 東京大学海洋アライアンス
- NPO法人「森は海の恋人」

5 本校のESDでめざすもの

(1) ESDのねらい

- ① ESDの実践を通して「人格の発達や自律心、判断力、責任感などの人間性」を育むことを目指し、特に他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育む。
- ② 地球温暖化や自然災害、防災など地球規模の諸問題に児童が対処できるように、「総合的な学習の時間」の中で、環境教育を中心に新しい教育内容や手法の開発、発展を目指す。

(2) ESDで育てたい資質・能力

本校では、目指す児童像を「地域の豊かな自然に触れ、様々な人との交流を通し、豊かな心を持ち、ふるさと唐桑を愛する子ども」と設定している。そして、ESDのテーマを「海に親しみ、人と関わり、海と共に生きる海洋教育の推進」としている。唐桑地区は、「海と生きる」のキャッチフレーズを正に表している地域といえる。海など自然の恵みを受けて成り立っていることを体験しな

がら理解し、自然保全のための実践力などを高めていく。

6 本年度の実践事例

(1) 1、2年生（生活科）「海に親しもう」

1年生は11月にサケの飼育活動を行い、次年度2年生になって、4月に稚魚を放流する。今年度は、1年生と一緒に近くの浜に放流した。



<4月 大豆栽培>



<3月 豆腐作り（昨年度）>



<4月 サケの稚魚放流>

(3) 4年生「海の生き物やカキの秘密を探ろう」

磯の生き物やカキの秘密を調べたり、カキの養殖体験をする。6月には、カキの種はさみを体験した。3学期は、カキの解剖をしたり、カキいかだの仕組みを理解するためにカキいかだの模型作りをする。



<11月 サケの飼育活動>



<1月 海藻押し葉作り>



<6月 カキの種はさみ体験>

(2) 3年生「海と関わる栽培活動をしよう」

栽培活動に理科的な視点で取り組み、豊かな土の中には豊かな生きものの世界があることを理解する。海藻肥料を利用した大豆栽培を行い、海水から取り出したにがりを用いて豆腐作りを行うことで、海と陸とのつながりを意識させる。



<10月 カキいかだの模型作り(昨年度)>



<7月 カキいかだの生き物調べ>

(4) 5年生「海と山、自然の関わりを知ろう」

カキの成長や海の生き物、自然環境との関係を中心に学習した。7月にカキいかだの周りの海水にいるプランクトンを採取して調べた。豊富なプランクトンがカキのえさになっていることを知った。プランクトンが豊富な海にするためには、栄養分を作り出す森が必要であることを学習した。また、「森は海の恋人植樹祭」に参加し、森と海のつながりを実感することができた。



<6月 森は海の恋人植樹祭への参加>



<6月 カキの耳つり体験>

(5) 6年生「豊かな海を発信しよう」

カキの温湯処理見学やカキの水揚げ・カキむき体験、定置網の体験をする。

6月にカキ砕きを、10月には定置網起こし体験とカキの温湯処理見学をした。



<6月 カキ砕き体験>



<10月 定置網起こし体験>



<カキの温湯処理見学>

11月には、「海洋教育子どもサミットin東北」に6年生児童が参加し、本校の取組を発表した。気仙沼市内の小学校や岩手県の小学校と海洋教育の取組について、児童同士で質問をし合って、情報の共有を図った。



<海洋教育子どもサミットin東北での発表>

地域の産業祭り「ごっつおーフェア」では、地元の企業の手伝いをしながら、自分たちが学んできたことや唐桑の海の豊かさについてまとめたパンフレットを配布した。人間の手では創れない「唐桑の海」の豊かさを再認識した。



<12月 ごっつおーフェア参加>

カキの収穫・カキむき体験では、漁師さんたちの工夫や苦勞、唐桑の海で働くことの誇りを感じ取ることができた。最終的には海の豊かさの恩恵を受けて人間が生活していることを実感しながら未来へとつなげる。



<1月 カキの収穫・カキむき体験1>



<1月 カキの収穫・カキむき体験2>

1月28日には、県漁協唐桑支所青年部が受賞した農林水産祭天皇杯賞受賞祝賀会で本校の取組を6年生全員で保護者や地域住民に発表する予定になっている。



<1月 発表練習の様子>

(6) 全校集会「今、地球で何が起きているか」

自分たちが体験してきた活動が、持続可能な社会作りとどう関係しているか、今、地球では何が起きているかを担当の先生から話してもらった。自分たちで、これからどんなことができるのか考え行動するきっかけになることを期待する。



<1月 全校集会の様子>

6 これまでの成果と今後の課題

(1) これまでの成果

- ① 唐桑の自然の豊かさを実感し、環境教育への関心・理解が深まっている。
- ② 地場産業としてのカキ養殖の体験を通して、生産者とのふれあい、将来の唐桑や自分の生活に対する関心が高まっている。
- ③ ふるさと唐桑への郷土愛や自慢できる地域作りに対する思いが深まっている。

(2) 今後の課題

- ① 年度が変わっても継続して指導できる体制作りが必要である。
- ② 防潮堤工事などの環境の変化に対応するなど、カリキュラムの改善が必要である。
- ③ 問題解決的な学習をさらに推進させ、自ら課題を見つけ自力解決していく場面を増やしていく必要がある。

小 学 校 賞

岡山県岡山市立第三藤田小学校
研究主任 ESD担当 板倉 真由美

「人・社会・自然などと自分とのつながりに関心を持ち、主体的に関わろうとする子どもの育成」

1 はじめに

藤田地区は岡山市の南西部、明治時代に兎島湾の干拓によって造成された農業地域である。稲作はもちろん、玉ねぎ・れんこん・なす・レタスなど野菜の栽培も盛んである。大変な苦勞をして、干拓地を農地に開拓してきた歴史があり、地域の方々の郷土への愛着や学校に対する思いは大変強い。しかし近年では、高齢化が進み、商業施設の立地や宅地開発など農地の非農業土地利用が進んできている。

子どもたちは、藤田の特色について尋ねられるとすぐに、農作物や自然を例にあげるが、地域の農業や自然に対する関心は薄い。また本校は小規模校でクラス替えがないため、子どもたちは新しい人間関係を築くことが苦手である。そのため、学校内では主体的に活動することができるが、一歩外へ出ると、自分に自信がもてない子どもたちも多い。

地域の方々が開拓し守ってきたこの藤田を、持続発展可能な地域としていくためには、藤田のよさをよく知り、藤田を愛する人を育てると同時に、ESDの視点に立った教育の推進が必要である。教科や総合的な学習の時間の目標や学習内容を、持続可能な社会作りの構成概念である「多様性・相互性・有限性・公平性・連携性・責任性」の6つの要素に、本校独自の「郷土愛」を加えた7つの要素に基づいて捉えた上で単元構想を設計し、実践することにより、ESDの視点に立った学習指導の展開が可能になると考えた。子どもたちは、この藤田の自然に囲まれ、地域の方々に支えられて生活している。「持続発展可能な社会づくりの担い手を育む」教育活動を行うことが、郷土を愛し、さまざまな「つながり」に気づき、自分を振り返ることのできる子どもを育てることにつながると考え、本主題を設定した。

2 活動の内容

(1) ねらい

様々なつながりの中から、自分を見つめ直し、自分の生き方を考えていくことのできる子どもを育てる。

(2) 実践の内容

「人・社会・自然などと自分とのつながりに関心を持ち、主体的に関わろうとする子どもの育成」という研究テーマの下、以下のような実践を行っている。

<社会や自然などとのつながり>

人・社会・自然など、現代社会の課題について追求していく中で、すべてのことは今の自分とつながっていることに気づき、自分の生活を振り返ることのできる単元づくりを行う。

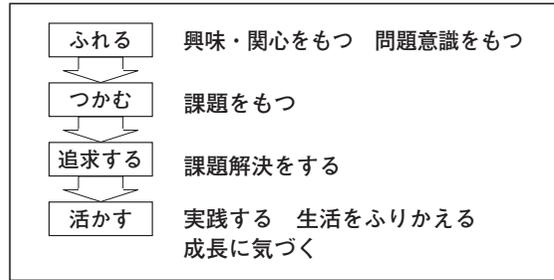
<人とのつながり>

学習の中で、意見交流や生の声にふれること、体験活動を行うことなどを大切にし、いろいろな人の考えや生き方にふれる場面を設定する。



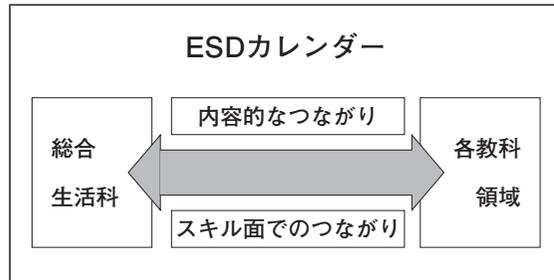
<単元構想でのつながり>

「ふれる」→「つかむ」→「追求する」→「活かす」の4つの段階で構成し、子どもの意識の流れを考えた授業を展開する。



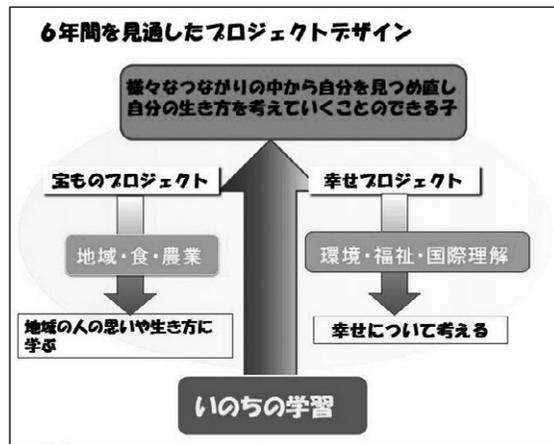
<各教科とのつながり>

ESDカレンダーを活用し、クロスカリキュラムの授業を行うことで、各教科で培った力を、総合的な学習の時間に活用し、育んでいく。



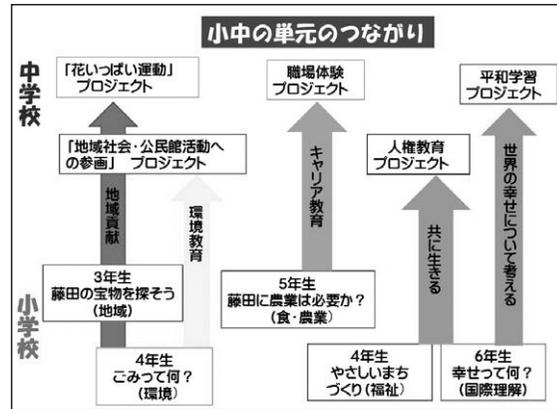
<学年のつながり>

各学年の単元を大きく2つのプロジェクトと捉え、子どもたちに育みたい思いや価値観を縦の系統で考える。



<学校間のつながり>

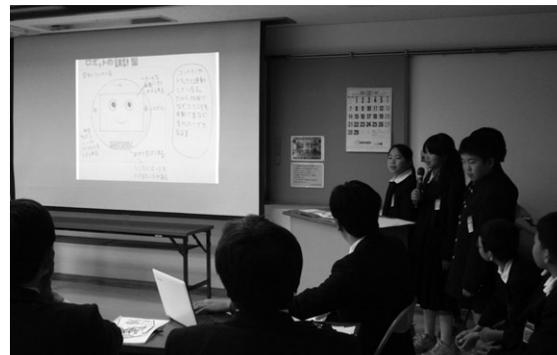
藤田地区内の3小学校で、総合的な学習の時間の共通テーマとめざす子ども像をそろえて取り組むことで、同じ思いを育んだ子どもたちを中学校へおくり、中学校でさらに発展させるといった縦と横のつながりのある単元になっている。



学年	共通テーマ	育みたい思い
3年生	藤田の宝物をさがそう	藤田に愛着をもつ
4年生	ごみって何?	人や自然を大切に
5年生	藤田に農業は必要か?	藤田に誇りをもつ
6年生	幸せって何?	多様な価値観を知る

<地域とのつながり>

「藤田地区ESD地域連絡会」を年2回開催し、地域の方との意見交換会や、児童生徒による1年間のESDの取組の発表会を開催している。地域の方の意見を聞かせていただき、地域の方と共に「地域に学び、未来を切り拓く藤田の子」を育てていくよう努めている。



(3) 各学年の実践事例

5年生 総合的な学習の時間

プロジェクト八十八「藤田に農業は必要か？」

5年生は「藤田に農業は必要か？」というテーマで藤田の米作りについて調べていく中で、自分たちの住む藤田の未来を考える学習を進めている。

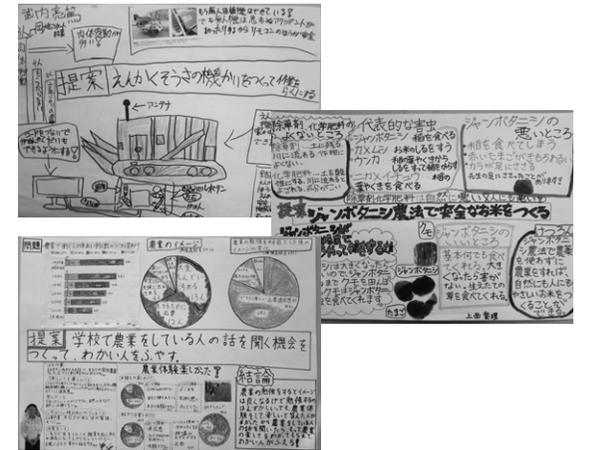
4月に地域の農家の方から、農業をして嬉しいことや苦勞していることについて直接お話を聞くうち、全員が「やはり米作りは必要ではないか」という気持ちになった。そこで、藤田の米作りが持続発展していくために「20年後の藤田の米作りがどうなっているといいか」について一人ひとりが自分なりの考えをもち、「提案書」を作成することにした。



地域の農家の方からお話を聞くと、「たくさん収穫できるとうれしい」「達成感がある」などの農業の楽しさと共に、「後継者がいない」「もうからない」「機械が高い」などの問題点が、藤田にもあることに気づくことができた。農業のよい点と問題点の両面から提案を考えることで、より具体的に考えがもてるようになった。



提案書を作るための調べ学習としては、地域の農業に携わっている方々にインタビューを行うフィールドワークやアンケートによる意識調査、バケツ稲による品種別比較実験、お米の食べ比べなど、体験学習を通して得た情報を自分の中で消化することで、子どもたち自身が納得した考えをもとに提案書を書くことができるようにしている。



一人ひとりが作成した提案書は、まず、クラスの友だちと考えを交流し、それぞれの提案のデメリットを互いの提案のメリットで解決する方法を考えた。しかし、例えば安全な米作りをするための「手間がかかる」というデメリットを解決しようとすると、「機械化するとお金がかかる」という新たなデメリットが生まれ、解決することは難しいことに子どもたちは気づく。そこで実際に地域の農業後継者クラブの方々や意見交換をすることで、地域の農家の方々が何を大切にしているのかに気づかせるようにした。

「安心して安全な商品を安定して届けたい」「自分たちが頑張ることで地域に貢献したい」という思いや、それを実現するために様々な努力をしていることを知ることで、子どもたちは「こんなにも頑張っている人がいる藤田はすごい」と、自分の故郷である藤田を誇りに思う気持ちがうまれてきた。



そして、今の自分たちにも何かできることはないかと話し合い、「残さず食べる」「いただきます、ごちそうさまをきちんと言う」など、日常生活の中で、自分たちにできることを実践した。

何度も話し合いを重ねるうちに、農業は農家の人だけではなく、消費する自分たちをはじめ、すべての人や環境などともつながっていることに気づくことができ始めたように思う。

6年生 総合的な学習の時間

「幸せって何？」

6年生では、世界に目を向け、他の国の状況を知ったり、支援活動を通して交流したりする中で、お互いの思いや価値観の共通点・相違点に気づき自分を振り返ることをめざしている。



まず、有森裕子さん主催のNPO法人であるHG（ハート・オブ・ゴールド）の方からカンボジアの現状についてお話を聞いたり、インターネットで調べたりして、子どもたちは、世界にはさまざまな問題があることを知る。また、カンボジアの留学生から「勉強して、学んだことをカンボジアの子どもたちに教えたい。周りの人みんなを幸せにしたい。」という思いを聞き、「幸せ」とは何かについて考えた。

一方、HGが運営している現地の児童施設であるNCCC（ニューチャイルドケアセンター）の子どもたちと、プレゼントや手紙の交換をしたり、スカイプで実際に話をしたりするうちに、「自分たちにも何かできることはないか？」という思いをもつようになった。



そこで初めは、HGの方に必要なものを教えていただき、地域や同じ中学校区の小中学校、公民館に呼びかけて、生活に必要な石けん、タオル、歯ブラシを集めて送った。自分たちの小さな呼びかけから、こんなに多くの協力が得られることに子どもたちは達成感をもったようだった。



さらに子どもたちは、「もっと喜んでもらえることはないか」と考え、一人ひとりが「どんな活動をしたらよいか」について考えをもった。自分たちと同じ子どもたちのことを思い浮かべ、喜んでもらうための様々な案が出た。



そこでスカイプを通じて、実際にHGカンボジア事務所スタッフに相談をしたところ、カンボジアの小学校には日本のような体育の授業がないということを知り、体育で使えるボールやマット、体育館建築の資金などを送ることに決め、募金活動を行った。マットやボールは、多く買えて、さらにカンボジアの人も儲かると考えて、HGに現地で購入してもらうことにした。誰かの役に立つことが、自分の喜びにもつながるということ、子どもたちは実感できたようだった。

このように、海外の方と直接対話し、自分たちにできることは何かを考え、HGの方と協働で物資支援活動を行うことで、遠くのことだと思っていたことを、より身近に感じ、今の自分の生活を振り返るきっかけとなっている。



(3) 成果と課題

○ただ単に体験活動を行うのではなく、どんな子どもを育てたいかという1年間の出口を意識して授業を行えるようになった。

○地域の方と交流する機会が増えたことで、子どもたちと地域の方との距離が近くなり、お祭りなどで親しく話す姿が見られるようになった。

○地域の農産物について学習するため、給食などで地産の食材が出ると「〇〇さんちのだ」と嬉しそうに食べたり、自分の家で作っているお米の品種を知っていたりと、興味をもつ児童が増えた。

○地域の方が学校の取組を理解した上で協力してくださり、共に子どもたちを育てていこうという気持ちが高まり、「このような子どもたちを育てていきたい」という地域の思いも聞かれるようになってきた。

○中学校区でESDに取り組んでいるため、小中学校の教員が集まって研修や打合せを行う機会が増え、とても仲良くなった。中学校区で子どもたちを育てようという意識が教員間にも生まれてきている。

●その単元を学習している時には子どもたちは意欲的に取り組むが、それを継続して生活に取り入れたり、価値観が変容したりするにはいたっていない。もっと子どもたちを揺さぶる大きな手立ての研究が必要である。



中 学 校 賞

東京都多摩市立東愛宕中学校
校長 千葉 正法

地域の核となる学校を目指して

1 現状の課題

(1)学校経営とESD

①2050年の大人づくり

日本を世界の中の課題先進国ととらえれば、本校の立地するコミュニティはその象徴と言える。国家プロジェクトとして多摩丘陵を切り開いて団地が開発され、約45年前にはほぼ一斉に入居が始まった東京のベッドタウンである。現在は人口約14万8千人で高齢化率が30%を超えようとしている。首都東京にあっても、学級減と地域の高齢化を視野に置かずには学校経営は語れない。日本の高度成長を支えた人々が子育てを終えて暮らす、完熟した街の未来を支えるのは、現在の小学生や中学生である。また、その子どもたちが社会の中心となっている30年後は、世界的にエネルギーの枯渇や人口のアンバランス、気候変動や人工頭脳の台頭などに拍車がかかり、地球や人類にとって課題がグローバルに複雑化し、解決が極めて困難な葛藤と選択の時代になっているとの予測がある。こうした背景から、多摩市では、ESDをすべての小中学校で推進し「2050年の大人づくり」を合言葉に、今できる最大の努力を教育に傾けようとしている。

本校はESDの推進拠点のユネスコスクールに都内公立中学校で最初に登録された。本校のESDの特徴は、3つのつながりと6つの実践をとおして、これまでの「学校のための地域」から、「地域のための学校」にシフトしていることである。これは、先にも触れた核家族がベースとなるニュータウンの現状と子育てや教育の私事化の行き過ぎた社会の状況、少子高齢化や経済的・社会的な格差が教育にも影を落とす時代背景から導き出されたものである。地域創生に向けてその核となるべく学校と地域コミュニティの信頼や互酬関係などのソーシャル・キャピタル（社会関係資本）を深め

るための学校経営が必要だと考えている。

②孤立から脱却を目指す

知識基盤社会と言われる現在、義務教育の課程を名実共に修了していることは極めて重要である。しかしながら、人工的な選別による街づくりに起因する環境的な要因から、学ぶことに意欲がわかず、生徒が反社会的な行為を繰り返し地域と学校を心理的・物理的に乖離させてきた。卒業後は早く家庭の働き手としての立場を求められ進学を投げ出す生徒や、職業＝日雇い＝稼ぎ、という狭い勤労観の中で無気力に職場体験に向かう生徒もいた。また、そうした風評は過去には学校選択性と相まって生徒数の減少に拍車を掛け、学校は地域からの孤立を余儀なくされた。本校は、何よりも生徒たちの自信と信頼を回復し、未来の地域の担い手を育てる責務を果たさなければならない。

そのために、私は4つの「C」を学校経営の柱と捉えている。それは、教育課程や教育内容の「カリキュラム」、学校・地域文化の「カルチャー」、ソフト面を加味した学校施設・設備を指す「キャンパス」、地域や地域の教育資源である「コミュニティ」で、それぞれの視点を調和させたホール（全体や総括的）・スクール・アプローチで取り組む必要がある。これら4つの教育資源を相互に関連付けて活用することで、学校経営・運営の質的な向上が図れる。部分最適ではなく、全体の調和を保ちながら学校を改善する必要がある。学校が地域の核となる上で重要な視点であると感じている。

(2)つながる地域と教育力の回復

①地域の支えとしての学校を目指す

現在の本校の中には、数年前までの荒れる中学校の風景はない。粘り強く生徒自身に学ぶことの意味を問いかけ、自立と協働を働きかけてきた

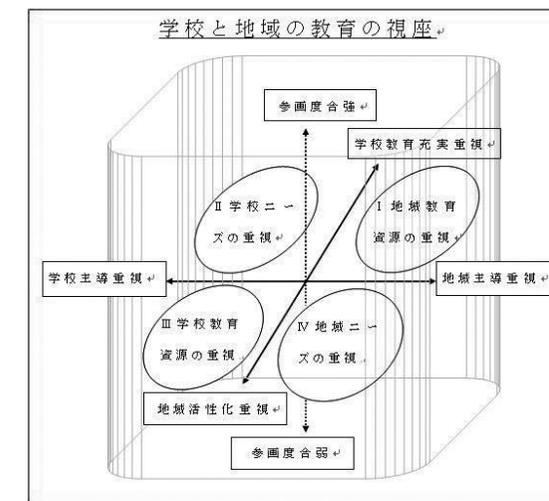
教職員があったからこそである。しかし、その一方で地域の学校を見るまなざしは、簡単には改善されない。そこで、意図的にTwitterなどを活用した情報発信を展開しつつ、地域を活用した学習を展開することで、学校の教育活動全体をとおして学校と生徒への認識やイメージの変容を図っている。すでにそうした学習活動は、教育課程の内外を含めて30を超えるまでになり、地域の古老たちは、「生徒は本当に変わった。東愛宕中学校生の参加なしでは、地域の行事は成り立たない。本当によくやってくれる。感謝しているよ。」と生徒たちに語りかけてくれ、生徒たちもそれを励みにほぼすべての生徒が様々な地域行事に参加するようになった。

2 課題解決の実践

(1)カリキュラム・マネジメントの視点

①地域との連携の在り方の見直しと8類型

本校の地域との連携を進める上で、その内容と意図を明確にするよう見直し、イニシアチブと目的を軸にした2次元で4つ、生徒の参画度合いとしてロジャー・ハート『子どもの参画』に示された「参画の梯子」を軸に加えた3次元で八つに分類を試みてバランスをとっている。



とかく学校は外に開くことを求められるが、今後は「社会に開かれた教育課程」として学校の開き方や協働の在り方が課題となってくる。実際の授業や活動としての目的はもとより、学校内外の

様々な教育資源の活用の手法を明確にすることがカリキュラム・マネジメントである。3次元とすれば、ESDの学びと実践が視覚的に学校内外と共有できると考えており、PDCAサイクルに基づくカリキュラム・マネジメントにおいても学習目標の確認やどう学ぶか、誰から学ぶかを考える視点としても有効である。

②総合的な学習の時間とアクティブ・ラーニング

学習内容をさらに探究する場として、文字通り総合的な学習の時間の意義は大きい。一例を挙げれば、本校の行う職場体験では、一週間働く体験以上に、労働を通してどう自らを社会参加につなげていくかを重要視している。ESDの学習として、それぞれの教科で環境やエネルギーの問題などについて学んだとしても、さらに実際の社会や現実の課題としてどう解決できるかを学ばせたい。それぞれの事業所で行われている環境保護の取組やCSRやCSVの社会貢献活動などについても職業体験の延長線として学び、企業のコンプライアンスと社会的な責任という視点からも学ばせていくことにより、利益や賃金の多寡だけでなく、社会に出て働くことで世の中をよりよくしていけるという見通しをもたせたいと考えて送り出している。

③学校支援地域本部の設置

ESDを通して、学校と地域の取組が相互に充実できた背景には、一昨年から設置した学校支援地域本部の存在が欠かせない。本校では、「愛宕アカデミー」と総称し、現在まで3つのテーマに取り組んでいる。1つ目は毎週水曜日放課後に行う学生ボランティアによる3時間の学習教室の運営、2つ目は地域のボランティアや教育資源との調整、3つ目は校内起業体験である。コーディネーターを元本校校長に依頼したことも功を奏しており、地域と学校を知っていればこそその充実が図られている。学生ボランティアは、放課後学習教室で生徒の学習を支援した後は教員採用試験や臨床的な研修を位置付けており、生徒・ボランティアの学生・学校・地域の四者にメリットがあるように構成されている。また、地域の伝統行事やボランティア活動などの窓口や検定・資格取得の支援などが充実する一方、地域の楽農倶楽部多摩と協働で養蜂

によりハチミツの販売を起業する活動が始まっている。こうした利益や増加する補助金の管理なども学校支援地域本部が担っている。



(2)ユネスコスクールとしての学校経営

①ソーシャル・アクションによる実践と行動

地域や自治の課題を実際に解決していくのは、一部の学識経験者や行政ではない。地域の課題を学校や地域で学んだことを基に、できることは自ら、または仲間と一緒に解決していく姿こそ、これから求められる市民・生徒像である。多摩ニュータウンならではのローカルな課題をグローバルな視点で解決する人材を育てたい。

本校は一昨年、東京都安全教育推進校として実践的な研究開発に取り組んだ。自助と共助の力を高めるために、「防災自助パック」というマイ備蓄を全校生徒が教室に持っている。共通には最低限の保存食と水を教材費で準備し、そこから先は学級や家庭で話し合っ、首都直下型の地震に備えている。また、東京都帰宅困難者対策条例を受け、保護者の引き取りが困難なベッタウンならではの学校宿泊を念頭に被災後72時間の装備をそれぞれに考えさせ準備させている。「その時」に封を開ける保護者からの励ましの手紙も携えている。自助の学習は、人をどう助けるかという共助の学習への呼び水となり、学校が避難所となった場合に中学生としてどう貢献できるかを様々な考えている。

そして、高齢者の多い地域を考えた生徒からの提案で、全校生徒が「認知症サポーター」の資格を取得し、避難所設営に向けた宿泊訓練まで実施するようになってきた。生徒と保護者と地域住民が協力して、炊き出し訓練を行い、避難生活を想定した学習と交流を重ねている。地域の持続可能性

を高める活動に対して、消防署や行政なども本校の活動に様々なバックアップをして支援してくれている。

②社会と世界に開かれた学校とその教育課程

こうした活動の延長に、本校では国内外の多くの学校や人々と協働の学習を行っている。特にESDを学ぶユネスコスクール間での交流が行われている。生徒は自らの学習成果を発表するばかりではなく、地理的な条件や様々な経験が異なれば正解は一つではないことも学んでいる。防災について学習する上で、宮城県気仙沼市の中学校と相互の直接訪問やWeb会議での交流を行いながら、防災について実際に被災した地域からの助言を自らの学習に役立てた。更に、先の熊本地震に際しても募金を呼びかけるポスターを生徒の発案で作製して、市内の学校や市役所、駅などに掲示し、直接現地に募金を届ける活動を行っている。



また、(株)ユニクロの支援を受けて、子ども服を集めてアフリカ等の難民に届ける活動を継続しながら、世界の趨勢の理解とそこに参画する態度を養うと共に企業のCSR活動を学んだり、キャリアプランニングを学んだりする学習を行っている。この他、保険会社によるライフプランニングやリスク

マネジメントなど、企業の第一線の研究者や専門家を招いて、実際の社会で起きている事象について知ると同時に、問題解決的な学習として取り組みながらキャリア教育の充実を目指している。



更に、ジャパンアートマイルの支援を受けたアートマイルプロジェクトにも毎年参加しており、これまでにキルギス共和国、アゼルバイジャン共和国、インドネシア共和国などの学校と壁画作成を通じた交流を重ねており、Web会議でそれぞれの国の環境や文化の理解と国際協働学習を継続的に展開している。

④カリキュラム・マネジメントと本物との出会い

実際に社会経験の浅い教員が多い本校では、様々な学習場面でその道のプロフェッショナルを招いて、「本物」として授業や行事を企画している。

例えば、ESDとオリンピック・パラリンピック教育の一環として日本の伝統文化を学ぶために、ミスユニバース代表などに日本の伝統的な礼儀・作法や和装を指導している著名な講師が直接生徒に指導をして、作法の起源や歴史的な背景を含めた文化までを体験的に学べるように工夫している。季節のしきたりの意味や和装の着付けなども学びながら、結果として「世界のどこに出しても恥ずかしくない礼儀作法」を身に付けて、卒業までには全員が「中学生マナー検定」の資格を取得する。実際に入試に向けた面接の指導などでも統一的な指導ができ、改めてする指導は内容的な指導に集中できる。

更に、地域の伝統文化の継承者としても地域在住のプロフェッショナルに就いて地域の伝統文化や伝統食などについて実際の体験を通して学び、このままでは継承が困難な地域の伝統を組織的に学校に

取り込みながら継承する活動を進めている。こうした活動も先に述べた学校支援地域本部の設置があった実現したものであり、教員が対応することも最小限で、問題解決的な学びを構築するための事前の調整や事後の課題整理などもスムーズである。



また、それぞれの教員が教育のプロフェッショナルとして自律性を確立することも重要な視点だと考えている。特に国際社会を背景に海外の教育事情や国際的な学力論争などの理解を通して、自らの教育実践を見直し自らの視点を構築することが必要である。本校では、ユネスコスクールの利点を活かして教員の海外派遣や海外の教員の訪問が毎年のように行われるようになった。今年度もタイ王国教員の訪問を受けた。とかく内向きと言われたり仕事に忙殺されたりする日々ではあるが、限られた貴重な機会を教育の質的な向上と人材育成にも資するように、今後も継続的に活用していきたい。

4 将来に向けたビジョンと新たな学校像

(1)学校と地域の互酬性と学校経営

地域の創生・再生は、全国どこにいても大きな問題であり、様々な手法と工夫が行われている。多摩ニュータウンにおいても、公共施設の更新や団地の建て替えという手法で、住民や世代間の流動性を確保しながら持続的・発展的な再生を図ろうとしている。ハードの面は行政やデベロッパーに任せればよいかもしれないが、実際にそこで暮らす住民にとっては、今後様々な問題が生じる可能性があり、今後の日本再生の過程では市民の自立と多様性の確保が問題解決の鍵を握るのではないかと考えている。いずれ高齢化した旧住民と

若い世代の新住民の確執、日本の文化と海外の文化や宗教との衝突、経済的な不平等や格差と軋轢などに苦しむことが予想される。こうした時代が生徒たちの将来に訪れるとするならば、今の学校は何ができるのかをしっかりと考えておきたい。学校自身が、いまの学校の姿と将来の社会とを対比して、自ら新たな学校像を自己変容によって生み出す努力を払うことが重要だと考える。

(2) ソーシャル・キャピタルと地域の核となる学校の構築

学校教育は地域を変え、地域を支えるプラットフォームとなり得る。地域コミュニティは、わが国の学校教育の原点であり、改めて今後の教育再生の視点としても確立する必要がある。また、地域の創生・再生は、地域の絆や信頼の再生・つなぎ直しと言い換えることもできる。地域の課題を知り、その解決に向けて学ぶ姿が本校の生徒たちの中に広がりを見せている。一度は地域から疎まれた本校が教職員の努力により、一つの方向に力を結集したとき、徐々にではあるが保護者や地域からの見方が変わり、生徒たちが誉められたり、認められたりする機会が増え、地域のボランティアや伝統行事の運営から生徒が加わり活躍する姿が見られるようになってきた。それにつれて、コミュニティと学校の関係も悪循環から好循環に反転し始めて、心強いことに地域在住のかつての卒業生も学校や地域の再生に手を貸そうという動きが見られるようになってきた。学校の主導から地域の主導を引き出しながら、一層学校と地域の信頼関係や互酬性が深まり強くなっていくことを期待し、最善の努力を今後も重ねていきたい。



また、結果に一喜一憂するつもりはないが、全国学力・学習状況調査の中で顕著な変化が表れている。社会参加や地域貢献への意欲を示す項目で全国平均の2倍に増えてきたのである。中学生にとっては決して容易な状況とは言えない地域の中で、学校と地域との相互作用の結果として、学校で学んだことを活かして地域に貢献し社会を変えていこうとする生徒が着実に増加している。東京都では、2020年を控えて、児童・生徒にボランティア・マインドの育成をはじめとする「オリンピック・パラリンピック教育」を推進している。本校で全生徒がボランティア経験を積む。また、OECDのPISA調査をはじめとする「知識や技能等を実生活の様々な場面で直面する課題に活用できるのか」、さらに「社会に開かれた教育課程」として、「よりよい社会をつくるという目標のもと、教育を通して地域社会とつながる学校」を目指すことは、教育のプロセスとアウトプットを実社会や現実社会の課題と符合させていくことだと考えている。学力観がコンテンツ（内容）からコンピテンシー（資質・能力）へと変容を遂げる中で、社会貢献への意識の高さは、学びへの主体性を高め、社会への参加意欲の向上を引き出すことにつながる。本校のESDは、そうした一里塚にも満たないが、今後も持続発展可能な社会の構築と次世代の育成に向けて粘り強く進めていきたい。

高等学校賞

渋谷教育学園渋谷中学高等学校

教諭 北原 隆志

自ら調べ、考え、行動し、発信する授業

1) ねらい

①地球社会が抱える問題について多角的かつ専門的に学ぶ態度、②自ら調べ、考え、行動する習慣、③世界へ発信できる能力を兼ね備えた、持続可能な地球社会構築の一助となる人財の育成。

2) 実践内容

I. 教科横断型アクティブラーニング授業：

高校1年生～2年生を通し、高齢化・少子化、女性の社会進出、子どもの人権、水不足、再生可能エネルギー、イスラム教、生物多様性などの様々な問題を、複数の教科が連携したアクティブラーニング授業で学び、それについての各人の考えを英語で発信する。

《高校1年での取組》

1学期 『The world in 2050』

グローバルリーダーとして、地球社会が現在抱える数々の課題について、日本語、英語で考え、議論し、解決策を提示できるようになるには、その課題についてのスキーマ（体系的知識）を得ることが必要である。本プロジェクトは、エコノミスト誌が2012年に刊行した『2050年の世界：英「エコノミスト」誌は予測する』（原題：The Economist : Megachange : The World in 2050）、『21世紀はどんな世界になるのか』を導入教材とし、今後大きく変わっていく国際情勢を多角的な視野から学ぶ取組である。テーマのもとに、グループにわかれて議論し、自分たちの知識と調べた事柄から、解決にむけた提案を発表した。

★「2050年を予測する」取組

2050年の世界、現在の中高生は50歳前後になっている。人口動態の統計データから、この先に起こる大きな変動を予測した。人口が急激に

減少する地域、現状維持が続く地域、それぞれに起こる経済活動や国際情勢の変化、世界各地で変わる人々の生活、新たに生まれる技術の進歩などを積極的に捉えた。現代社会の授業では、生徒が授業をつくる「2050年の未来をデザインする」プレゼンテーションを通じて、将来を具体的にイメージできることを目指した。また、ウズベキスタンから日本へ留学している大学院生による女性の社会進出についての講義も取り入れた。その理解のもとに、英語の授業では、ディベートの議題として取り入れ、国際情勢を多角的な視野からとらえることを目指した。

2学期 『Hiroshima Project』

高校1年生は、秋の校外研修として、広島を訪問した。実際に足を運び、フィールドワークを行うことで、被爆者の思いにふれ、人間の安全保障とはどういうことなのか、何が必要であったかを知り、考えを深めることができた。事前学習では、複数の教科からのアプローチによって多角的な理解を深め、事後学習では自分の考えを英語で発信し、日本に留学している大学院生やアメリカの高校生とも意見を交換し、その違いについて学んだ。また2月には、代表生徒がアメリカのSt. Stephen's Episcopal School を訪問し、本プロジェクトの発表を行った。

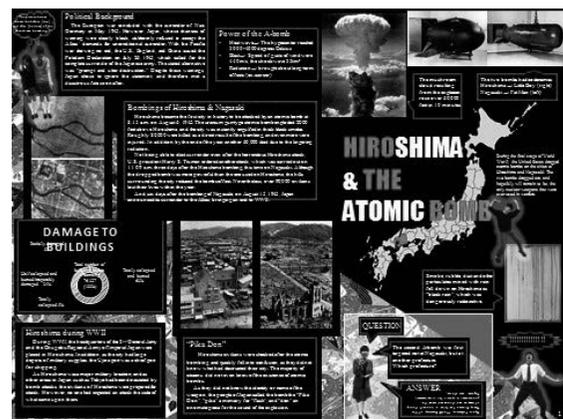
★「ヒロシマから平和を考える」取組

10月の広島研修に向けて、SGHの平和学習を公民科、情報科、英語科や国語科が連携して行った。現代社会の授業では、日本の安全保障環境の変化やアメリカのリバランス政策など現在の国際情勢について理解した上で、安全保障と核の抑止という観点から「安全保障の理想と現実」について議論を交わした。そして、研修前には

DVD教材『The A-Bomb ヒロシマで何が起きたか』を視聴し、研修中のフィールドワークなどを経験した上で、一人ひとりが「ヒロシマから考える」について論じた。現代文の授業では、比較文化論としての核をテーマに考え、アメリカと日本における表現方法の違いについて考えた。

★「Hiroshima Brochure Project」

研修前には、情報の授業で広島を紹介するHPを日本語で作成したが、研修後は、英語の授業で、アジア、中東、アフリカといった地域から東京外国語大学の大学院に留学中の方々をメンターとして迎え、助言をもらいながら、広島研修を通じて考えたことを「Hiroshima Brochure」としてまとめ、クラスで発表した。完成したBrochureはフロリダのSt. Stephen's Episcopal Schoolにインターネットで発信し、世界史の授業において教材として使用された。



3学期 『Wars and Conflicts』

現代社会が抱える紛争にかかわる諸問題には、単純な解決方法はない。1つの課題に対して、様々な専門的なアプローチをし、それらを統合することによって、解決の可能性が見えてくる。本プロジェクトでは、英語の授業で、地域社会が抱える戦争や紛争の課題について7つの分野（経済学的、現代社会的、歴史的、理科学数的、文学的、美術音楽的、家庭科保健体育的）にグループ分けをして、解決に向けた提言を作成した。またクラスでの発表は、英語圏の小学生を対象とするイメージを持って行い、専門知識をいかに分かり易く伝えるかという点で工夫をさせた。最後は、それらを統合するには何が必要かを互いに考え、英語のエッセイにまとめた。



《高校2年での取組》

高校2年生では、国際社会における様々な問題について家庭科・現代文・化学・生物・地理・世界史の授業における専門的な学びを統合し、英語で発信するSocial Justice Projectを行った。

1学期 Child Labor

★子どもの人権を考える取組

英語の授業では、クラスの半分をコーヒー農家、もう半分をコーヒー会社のマネージャーと設定して、①Could this process be made more efficient?と②How can you make the maximum profit?の2つのトピックについての話し合いをしたり、コーヒー生産流通経路に関するロール・プレイを行うなど、生徒が積極的に発言できる機会を多く設けた。社会の課題が自分たちに関わる問題であることに気づき、そのために必要な行動を考えた。

2学期 Water, Renewable energy, Islam

★現在の国際社会が抱える環境と宗教の問題について考える取組



2学期は、水問題、再生可能エネルギー、イスラム教の諸課題を取り上げた。授業ではシンガポールの高校生とのディベートやイスラム教信者の方からのプレゼンテーションを聞くなど、多様な意見に耳を傾ける機会を持った。偏見をなくし、協力し合って課題解決に向かう態度を養った。

3学期 Biodiversity

★グローバルな視点から生物多様性を考える取組

生物及び現代文と英語の連携授業で、地球社会における生物多様性の重要性と、環境に大いなる影響を及ぼす我々人類の責任について学んだ。文系生物選択者によるプレゼンテーション授業、環境教育に力を入れているオーストラリアからの留学生による生態系についての発表等が行なわれた。

II. Service Learning :

高校2年生は年間を通して、高1からの授業で学んだことをもとに、グローバル問題解決に向けて、高校生である自分にできることは何かを、教員の指示なしに各人が考え、個人、あるいはグループで実際に行動（ボランティア、国際会議への参加など、自分なりに企画を立てて実行）する。活動後は、そこで学んだこと、感じたことを学内外に広く発信する。

★授業内ミニプレゼン

英語の授業において、クラス内でペアを組み、授業で学んだ社会問題に関してより深くリサーチし、問題の概要と、高校生ができる解決策をまとめ、1ペア2～4分でミニプレゼンテーションを行った。発表後の質疑応答も英語で行った。

★社会貢献活動

各生徒は、授業やミニプレゼンの準備を通して、グローバルイシュー解決に向けて、今の自分にできることを考え、実行に移した。その社会貢献活動は個人でも、グループで行っても良いとしたので、学校集会で参加を呼びかけて学年を超えた共同プロジェクトを行った者、NPOなど外部の活動に参加した者、夏季休暇を利用して家族と一緒にいった者、自らNGOを立ち上げた者など多岐に渡った。活動後は発信を義務づけたが、発信の方

法や場所も各人に任せた。校内の集会や通信を利用した者、ホームページを立ち上げた者、団体の季刊誌に投稿した者、学園祭でプレゼンテーションを行った者、他校の生徒を招いてワークショップを行った者、内閣総理大臣に提案書を直接渡した者など様々だった。

★英文報告書の提出

高2の3学期に、①活動動機、活動団体、活動内容の紹介 ②その活動から何を学んだか ③その活動をどのように発信したか、という3点を英語でまとめ、Social Justice Activity Reportとして提出させた。

《Service Learning活動事例》

●サミット日本代表：J7ユースサミット2015（ドイツ政府主催の高校生国際会議）に日本代表として参加し、地球社会の問題解決のための提案書をドイツのメルケル首相、安倍首相に提出。その後、小学生や全国の学校長などを対象にプレゼンテーションを行うなど、社会への啓蒙活動を継続し、伊勢志摩J7サミットのアドバイザーも行った。本年5月に高校生を対象にしたモデルG7サミット（一般社団法人日本高校生ディベート連盟後援、日本ユニセフ協賛）を企画・開催し、日本の高校生の社会参画に対する意識をまとめ、8月、J7フォローアップ・セミナー（ドイツ政府主催）において官房長官を初めとするドイツ政府の関係者に向けて発表、報告した。



●障害児教育職業訓練センターの訪問：ブータンにある、障害児のための職業訓練センターにてボランティア。帰国後は、学園祭にて啓蒙及び募金活動を行った。

- 「ストップ！児童労働キャンペーン2015企画 児童労働にNo！レッドカードアクション」：ユニセフの主催するレッドカードアクション活動を支援するイベントを文化祭にて開催。
- Wish House: フィリピンに建てられた、公立学校に行けない子供たちのための学校Wish Houseの支援活動として、日本語絵本の英語版複写を行った。
- “Because I am a Girl”：国際NGOプランジヤパンとコラボレーションをして、女性の社会進出と権利向上を支援するイベントを文化祭にて開催。
- Harmonyイベント：レモネードを配布しながら、国境なき医師団への募金を呼びかけるイベント。本校生徒が企画・実行を行った。
- 海底ゴミ拾いボランティア：沖縄にて海底5～10mまでダイビングの装備を着用して潜り、海底ゴミ除去するボランティア。
- 多摩川クリーン作戦：世田谷区多摩川総合支所・地域振興課主催の河川敷清掃ボランティア。
- きょうだい児ボランティア：神奈川県立こども医療センターにて、障害や重篤な病気を持った児童の兄弟児の心のケアを行うボランティア。
- 1日保育のお手伝い：東京都西東京市のびのび保育園で保育士の手伝いをするボランティア。
- 老人ホームでのボランティア：東京都練馬区のキングス・ガーデンという老人ホームで高齢者とふれあい、配膳等の手伝いをするボランティア。
- ごみゼロナビゲーション：NPOグループiPledgeが行っている活動を支援。Fuji Rockや肉フェスなどのイベントでオリジナルゴミ袋の配布やごみ分別のサポートをすることで「参加型」のごみ削減やリサイクルの実践を促した。
- 学童ボランティア：中野区U18プラザ中央にある学童で小学生の世話をするボランティア
- 湘南海岸林ボランティア：地球緑化センター主催の湘南海岸林のつる切りをするボランティア
- 撤収ボランティア：コミックマーケットが開催された国際展示場の撤収作業をお手伝いするボランティア
- 東北ボランティア：一般社団法人kotネットワーク主催の活動。東日本大震災で被害を受けた小泉地区の住民とのふれあいを通して、心のケアをするボランティア。

- 渋谷お助け隊ボランティア：Japan Tour Guideの主催する、外国人観光客に対してフリーガイドをするボランティア。
- 動物保護センターでのボランティア：東京都葛飾区のアルマ東京ティアハイムにて保護犬・猫の世話をするボランティア。
- 離島での英語読み聞かせ活動：自ら立ち上げたボランティア団体FROGによる。
- 外国人観光客案内：渋谷駅、浅草駅周辺でプレートを掲げ、道が分からずに困っている外国の方に英語やフランス語で案内をした。
- 若者の社会参画についてのワークショップ：他校の生徒さんを招いての英語によるディスカッションを行い、その結果をベルリンで開催されたJ7フォローアップ会議においてドイツ政府関係者や各国代表の高校生に対して発表した。

3) 成果と課題

成果：

- ①地球社会が抱える問題について、各人が自分なりの考えを持ち、深い議論を英語でもできるようになった。
- ②社会の問題を「自分の問題」として考えられるようになり、社会参画の意識が高まった。
- ③自分で調べ、考え、決定し、行動して、その成果を他者へ発信したという経験を経て、自分に自信を持ち、自己肯定感が高まった。
- ④キャリアを考える際、持続可能な地球社会の構築に自分がどう関われるか、具体的に考えるようになった。

課題：

生徒たちは高校生でできることには限界があるということも学び、将来的に各人の専門分野で問題解決に向かって行く気持ちになっている。それを支え、実現にまで持っていく卒業生のネットワーク作りをすることが、今後の課題である。

審査委員特別賞

群馬県立利根実業高等学校

校長 横手 静夫

利根実業高校の教育実践

～専門高校としてのESD活動への取組～

1 本校の沿革

本校は、群馬県北部の沼田市にあります。沼田市は、河岸段丘の街として地図帳に載るなど全国的にも知られる景観の優美な地域です。

本校は大正8年3月に利根郡立実業学校として開校しました。100年近い歴史を有する伝統校です。

昭和23年には、利根農林高校に校名が変更され、農業科や林業科など農業を中心とした専門高校として、多くの農業経営者や林業経営者を輩出してきました。

昭和38年に工業系の土木科が設置され、その後、平成元年に情報技術科が新設されました。

平成2年には、校名が利根実業高校に改称され、自動車科の新設や森林科学科の新設など学科改編を重ね、平成17年4月に現在の農業系学科として、生物生産科とグリーンライフ科、工業系学科として、機械システム科と環境技術科が設置されました。

2 ユネスコスクールへの取組と目標

本校は、2014年10月に群馬県の公立高校として初のユネスコスクール加盟校になりました。

本校の教育目標は、「地域に根ざした特色ある実業高校の創造」です。目標を達成するため、ユネスコスクールの理念と4つの基本分野をもとに、現在、3つの柱でユネスコスクール活動を行っています。

1. 環境教育活動の目標

- 1) 草花の活用に必要な知識と技術を習得させ、草花の特性を活用した活動を理解させるとともに、植栽活動などを通し実践力を身に付けさせる。
- 2) 利根・沼田地域の特色を生かした自然・文化・交流をテーマに、地域資源の有用性を理解させるとともに、地域に根ざした事業の振興に寄与できる能力と態度を育てる。



植栽活動

- 3) 森林の利用・保全に必要な知識と技術を習得させ、森林の役割や生態について理解させるとともに、森林の保全と利用を図る能力と態度を育てる。

2. 食育活動の目標

- 1) 地産地消について必要な知識を習得させ、地産品の特性と加工方法を理解させるとともに、品質と生産性の向上を図る能力と態度を育てる。



食育活動（田植え指導）

- 2) 地域の自然環境・特性についての知識を習得させ、農産物の特性や生産に適した環境を理解させるとともに、品質と生産性の向上の改善を図る能力と態度を育てる。

3. 地域ボランティア活動の目標

- 1) 生徒と職員がともにステップアップできる、地域に根ざした特色ある専門高校を目指し、産業社会や地域社会で意欲的に活動できる、誠実で思いやりのある人材を育成する。

2) ボランティアなどの体験的な学習を通し、勤労の尊さや創造することの喜びを体得させ、望ましい勤労観、職業観の育成や社会奉仕の精神の涵養に役立てさせる。

3 ESD活動

1. 「総合的な学習の時間」での取組

本校では、キャリア教育として「総合的な学習の時間（1単位）」を1年生で行っています。ガイダンス的な指導を中心に、自己理解や職業観、ライフプランの作成、ユネスコスクール・ESD活動への理解などについての学習を行っています。

また、本校が位置する群馬県北部の利根・沼田地域は、自然環境に恵まれた地域です。その景観・環境保全を目的に、ユネスコスクールの4つの基本分野の1つである環境教育にも重点を置いています。授業では、「地域と環境について考える」をテーマに、ユネスコスクール・ESD活動についての理解を深めています。

農業系の生徒については、景観保全活動として校内の植栽活動にも取り組んでいます。

2. 環境教育活動の実践

利根・沼田地域は、上信越高原国立公園と尾瀬国立公園に囲まれた自然環境に恵まれた地域です。それらの自然環境を活かした「景観」作り、草花を通しての地域との交流活動などを行っています。

また、「自然と農業の共存」を目的としたワイルドライフ・マネジメントに関する研究、自然生態や環境に関する保全活動にも力を入れています。

1) 主なESD活動

①コミュニティガーデンの設営・管理

生徒と地域の方々との交流の場として、本校の一角と市街地にコミュニティガーデンの設営を行いました。環境技術科の生徒が設計と施工を行い、農業系の生徒が植栽と定期的なメンテナンス管理を実践しています。

現在では、市民の憩いの場として沼田市民に利用されています。

②花の寄せ植えプランタの製作と公共施設への寄贈（花いっぱい運動）

農業系の生徒を中心に、沼田警察署や利根沼田文化会館、JR上毛高原駅など公共施設への花の寄せ植えプランタの寄贈を年2回実施しています。

プランタの製作では生徒が播種から定植までを行い、「花いっぱい運動」係が配布を行っています。

③間伐材・リユース材を利用した花用プランタ・ベンチの製作と配布及び設置

環境技術科の生徒が中心となり、間伐材やリユース材を利用したプランタやベンチの製作を行い、コミュニティガーデンへの設置や利根沼田振興局庁舎への寄贈を行っています。

④地域文化施設の景観保全活動

沼田市上発知町に「日本三大天狗」の1つに数えられる迦葉山弥勒寺があります。参道には倒木があり、雑草が生い茂っていました。グリーンライフ科の生徒を中心に、チェーンソーによる倒木除去や刈り払い機による除草作業を行い、景観の保全活動に取り組んでいます。

また、「緑の砂漠化」防止のため、人工林間伐作業なども地域の森林組合と連携して行っています。

⑤交流を通しての花育活動

市内の幼稚園や特別支援学校に出向き、園児や生徒とコミュニケーションを取りながら、花の寄せ植えやプランタへの植栽など花育活動を行っています。

⑥グリーンカーテンづくり

地域の環境教育活動として、生物生産科では、小・中学校にグリーンカーテン用のゴーヤ苗の無償配布を行っています。

また、公共施設でのグリーンカーテンづくりや省エネ活動体験として、保育園児とのゴーヤ苗の定植体験活動も行っています。



園児とのグリーンカーテンづくり

⑦野生動物生息調査を中心としたワイルドライフ・マネジメント

中山間地では、イノシシやニホンジカなど野生動物による農業被害が深刻です。生物生産科では、農業の担い手为中心となり、野生動物の生息・行動調査や農業廃材を利用した侵入防護柵の製作と設営などワイルドライフ・マネジメント（野生動物保護管理）活動に取り組んでいます。

2) ユネスコスクール加盟後の活動に対する外部評価

- ・ぐんま花のまちづくりコンクール 優秀賞 グリーンライフ科（2014）
- ・ものづくりコンテスト測量競技 関東大会出場 環境技術科（2014、2016）
- ・北関東3県工業高生徒研究発表大会 県代表として出場 環境技術科（2014）
- ・群馬県学校農業クラブ各種発表大会 最優秀賞 生物生産科（2014、2015）
- ・関東地区学校農業クラブ大会 優秀賞 生物生産科（2014、2015）
- ・イオンeco-1グランプリ大会 審査員特別賞 生物生産科（2015）
- ・日本哺乳類学会高校生ポスター発表 最優秀賞 生物生産科（2016）

3. 食育活動の実践

利根・沼田地域は、農業が盛んな地域です。特に、枝豆やコンニャク、ブランド米の生産が全国的にも知られています。そして、観光資源を活かしたリンゴやブルーベリーなどの生産も盛んです。また、グリーン・ツーリズムの場として都市との交流が盛んです。

本校では、地産地消やグリーン・ツーリズムの観点から、地産品や生徒が栽培した野菜や果樹などを活用した食育活動を推進しています。

1) 主なESD活動

①産官学連携による食品開発及び普及活動

沼田市と地域との連携で廃棄用枝豆などを利用した「沼田の新名物『えだまメンチ®』」の開発を行いました。生物生産科を中心にその普及活動として、沼田市内や県外イベントでの販売活動や普及活動を行っています。また、NHKの旅番組でも地元の名物として紹介され、地域への経済波及効果をもたらしています。

②ブランド米の生産及び普及活動

利根・沼田地区は、食味の優れたお米を生産しています。しかし、ブランド力がありません。そのため、生物生産科を中心に食育活動の一環として、本校と地域が協力し、利根実業高校ブランド米『お利根ちゃん〜実とうんまい〜®』の生産を行っています。現在、地域と協力しながらブランド米の普及活動を行っています。

③お米栽培を通しての児童への食育活動

生物生産科では、地域の小学校5年生を対象に、お米の播種や田植え、収穫と実食まで、年間を通して指導を行っています。高校生が指導することにより、お米に対する児童の関心が高まりました。

④給食センターへの食材提供

生物生産科の生徒が栽培した、白菜や大根などを地域の給食センターに提供しています。給食センターから小・中学校に給食だよりを配布していただき、地産地消教育を行っています。

⑤園児への収穫体験による食育教育

園児の食育活動では、収穫を通して「楽しさ」や「喜び」を学んでもらうことが重要だと考えています。生物生産科では、生徒が栽培したサツマイモを園児に収穫してもらい、園児に収穫を通しての「食」への興味を持ってもらえるように取り組んでいます。

⑥児童への野菜栽培を通しての食育活動

児童への食育活動では、自分で栽培から収穫までを行い、それを食べて味わうことが重要だと考えています。生物生産科では、生徒が育苗した野菜苗の提供と栽培指導を行い、児童に野菜栽培を通して、育てることから農業を知ってもらい、子供達に「食」への感謝の心を学んでもらうことについて学習できるように取り組んでいます。

⑦中学生への食農教育

中学生に対して、野菜栽培技術を学習させ、「食」を支える根本である農業に関する知識・技術を体験させることも、食育活動として重要だと考えています。生物生産科では、中学校出前講座を行い、高校生が指導者となり栽培を通しての食農教育を行っています。



地域での食育活動

2) ユネスコスクール加盟後の活動に対する外部評価

- ・総務省「ふるさとづくり大賞」総務大臣賞受賞（2015）
- ・全国農業高校お米甲子園特別優秀賞（2015）
- ・群馬イノベーションアワード審査員特別賞（2015）

4. 地域ボランティア活動の実践

本校は、地域の一員として「地域に愛され、地域に誇れる学校」を目指し、ボランティア活動や地域貢献活動を積極的に行っています。

1) 主なESD活動

①地域清掃ボランティア活動

地域清掃ボランティア活動を年5回実施しています。野球部などでは、地域貢献活動の一環として、自主的に清掃ボランティアを行っており、地域から感謝の電話などをいただいています。

②学校開放講座

学校開放講座として、そば打ち体験講座・流しソウメン体験講座・鉛筆立て工作講座・ペットボトルロケット製作講座など、各科で学習した専門技術を活かし、地域の人達を対象とした開放講座を開催しています。リピーターも多く学校への理解にもつながっています。

③公共機関と連携した公道緑化活動

グリーンライフ科では、地域公民館などと連携し、国道や県道などの除草作業や花の植栽活動を行っています。また、道路沿いの耕作放棄地の除草・間伐作業も行っています。

④そば打ちを通しての災害被害地でのボランティア活動

生物生産科では、地域と協力して、気仙沼市に

出向き、そば打ちなどを通してのボランティア活動を行っています。また、沼田市で行われる気仙沼市との連携活動にも参加しています。

⑤野菜栽培や花を通してのボランティア活動

地域の介護施設などに出向き、生徒が栽培した野菜苗や花壇苗を使い、野菜栽培や花の寄せ植えを高齢者とふれあいながら実施しています。

⑥ネームプレートと印鑑立ての寄贈

機械システム科では、就学前の園児に入学祝いとして、園児のネームプレートを、NC旋盤を利用して作成し配布を行っています。また、市役所などに、旋盤技術を応用して製作した金属製の印鑑たてを感謝の気持ちを込めて寄贈しています。



ネームプレートの贈呈

⑦伝統工芸品カスタネットの製作と寄贈

グリーンライフ科では、伝統工芸の授業でカスタネット職人より技術を学び製作を行っています。そのカスタネットを地域の児童に配布し、音楽の授業で使用してもらっています。

⑧枝豆さやむき機の製作

沼田市は枝豆の生産地です。しかし、枝豆加工の際に、さやむきが手むきのため重労働です。そこで、機械システム科では、ピッチングマシンの原理を参考に、枝豆さやむき機を開発しました。現在、地域の施設で実用化に向けた検証を行っています。将来的には、製品化し、地域の加工所へ普及させていきたいと考えています。

2) ユネスコスクール加盟後の活動に対する外部評価

- ・第19回ボランティア・スプリット賞コミュニティ賞（2015）
- ・北関東3県工業高生徒研究発表大会最優秀賞 機械システム科（2015）

5. その他の活動

書き損じはがき回収、ペットボトルキャップ回収、ユニセフ募金活動などを、JRC部が中心となって全校生徒で行っています。

また、異文化理解として、青少年交流事業「JENESYS2.0」や日露青年文化交流（ロシア研修）、沼田ユネスコ協会「国際理解バス」などへの参加も行っています。

4 ESD活動の成果と課題

1. 活動の成果

本校では、ユネスコスクール加盟以前から、各コースの専門科目の学習を通し、環境教育活動や食育活動を実践してきました。

しかし、その活動は学校全体としての取組は少なく、各コースとしての独自の取組が中心でした。そのため、学校内での連携もあまりなく、単なる各コースの専門授業の一環としての教育活動でしかありませんでした。

ユネスコスクール加盟に向け、どのように取り組むことが、本校の教育目標でもある「地域に根ざした特色ある実業高校の創造」の実現とその達成に結びつくのかについて研究を重ねてきました。

その研究の過程で、校内での各コースの連携強化が必要ではないかとの意見も多く、各コースの連携が行われるようになりました。

また、生徒には、「生徒全員で、生徒を応援する。」ことについて啓発していきました。人は、人に褒められる、人に応援されることで自信を持ち成長していきます。大きなことでも小さなことでも、その目的を達成できれば褒める。頑張っている生徒を全員で応援する。このような体制作りを学校全体で取り組みました。

その結果、生徒全体の活動意欲が向上してきました。その相乗効果として、積極的に発表会やコンテストなどに参加する生徒が多くなりました。最初のうちは、あまり好成绩ではありませんでしたが、生徒が生徒を応援することで、徐々に好成绩を修めるようになりました。そして、自らがスペシャリストを目指すように変貌しました。

加盟申請の頃には、各コース間での協力による、協働での取組が行われるようになりました。その

例として、校内コミュニティーガーデンの設営では、グリーンライフ科の生徒がデザインを提案し、環境技術科の生徒が設計と施工を行う。コミュニティーガーデンに必要なベンチやイスなどは、環境技術科と機械システム科の生徒が製作する。そして、植栽に必要な樹木や花壇苗はグリーンライフ科の生徒が栽培し、生物生産科の生徒が植栽を行うなど、生徒が計画的に事業を協働で行い、自ら率先して教育活動に取り組むようになりました。

また、専門科目で身に付けた知識・技術を活かし、スペシャリストとしての意識を持ちながら、校外活動にも取り組むようになりました。その例として、迦葉山弥勒寺の参道の太鼓橋が壊れているとの話を聞き、環境技術科の生徒が生徒自らの発案で、その改修工事が終わるまでに必要な仮設橋の設置を行ったり、グリーンライフ科の生徒がその参道の下草刈りや、景観づくりを行ったりしました。

ユネスコスクール加盟後は、生徒が「地域の一員」であることを自覚するようになりました。そして、自ら考え、創意・工夫を凝らしながら自ら学習に取り組むようになりました。

幼稚園や小学校との交流、中学校への出前講座などでは、生徒が指導計画を立案し、生徒が計画的に指導を協働で実践し、終了後に自己評価を行うなど、生徒の指導性やコミュニケーション力の向上が顕著に見られるようになりました。

現在、学校が一体となり、地域の一員として環境教育活動や食育活動、地域ボランティアに取り組んでいます。そして、地域に愛され誇りとされる日本一のユネスコスクールを目指しています。

2. 今後の課題

地域を軸とした環境教育活動や食育活動などについては、その成果が顕著に現れています。

その一方で、「本校のユネスコスクール活動を地域でどのように展開していったのか。」「どのように地域に浸透させていったのか。」などについての活動情報を、広域に情報発信することができませんでした。

その方策として、今後はユネスコスクールのネットワークを活用した、広域の情報発信をしていきたいと考えています。

ネスレ日本ヘルシーキッズ賞

宮城県気仙沼市立面瀬小学校
校長 浅野 亮

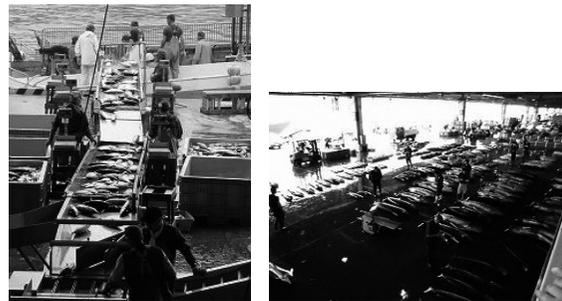
「海と生きる 気仙沼」魚食の魅力を学ぶ ～地域・専門機関と連携した産業と食の学習～

はじめに

ふるさと気仙沼と水産業

面瀬小学校が位置する気仙沼湾は、リアス式海岸の地形を生かした天然の良港として、全国の漁船に利用され、遠洋・沖合漁業の根拠地として発展してきた。気仙沼魚市場は、黒潮と親潮が交差する三陸漁場を眼前に抱え、豊富な魚介類が水揚げされ、漁業や水産関連の仕事に従事する人も多い。

気仙沼市の復興キャッチフレーズは「海と生きる」。気仙沼湾岸は、東日本大震災で甚大な被害を受けたもの、関係者の並々ならぬ努力によって、わずか3か月後には魚市場の機能を復旧し、カツオの水揚げを再開させている。水産業は、気仙沼の人々の暮らしを支える基幹産業といえる。



＜地域のシンボル気仙沼魚市場＞

面瀬小のマグロ船見学

面瀬小学校における水産業に関する地域学習は、世界や環境との結び付きという視点から、14年以上に渡り継続して取り組んでいる。

当時の面瀬小学校は、全校を挙げて「国際環境教育」を実践してきた経緯があり、水産業を経済活動の側面からだけ見るのではなく、それを支える自然環境や世界との結び付きの視点から捉え、魚を取り巻く諸問題を国際的視野から探究し、豊かな海の保護について地球規模で考える活動を行ってきた。

地域や児童の実態に合わせてその都度プログラムに改善を加えてきたが、「マグロ船見学」「親子料理教室」等の水産業に関する体験活動は毎年のように行ってきた。当時、構築された人的ネットワークや企業との連携体制は、面瀬小学校の貴重な財産として引き継がれている。

本実践は、これまでの実践をもとに「水産業を支える環境（自然・人）」「水産業と食」「魚と栄養」の視点から学びを再構築したものである。

1 ねらい

気仙沼の基幹産業である水産業や魚食について探究する活動を通して自分たちの生活が自然環境を生かし、地域の人々の努力に支えられながら成り立っていることに気付かせる。また、魚食の優れている点に気付き、自分の生活に進んで取り入れようとする態度を育てる。

地域が抱える課題やよさについて考えさせる活動を通して、未来に向けて主体的、創造的に生き、地域に貢献する子どもを育てることを最終的なねらいとする。

2 実践内容

(1) 活動の視点

①横断的な単元構成

小学5年生の総合的な学習の時間、社会科、理科、家庭科との関連を図りながら、児童が海の環境を通して水産業や食について関心を高めながら探究活動ができるような活動を構成する。

今年度は、特に、家庭科の授業でネスレヘルシーキッズプログラムの栄養編を使った学習を行い、健康教育の視点から魚のよさを見つめさせる。

その他にも、体験活動と調査活動、交流活動を効果的に構成し、目的意識と必要性を重視した

学習を推進する。

②地域に根ざした体験的な学習の導入

震災の影響から児童は「海で遊ぶ体験が少なくなっている」という評価を受けて、海や海辺の環境に関心をもつことができるように、課題設定の前に海に親しむ活動を設定する。

気付きや学習意欲を喚起し、人々の生活や食について、実感をもって課題を解決できるようにマグロ船や水産関連施設見学等の体験活動と食に親しむ活動を取り入れる。

地域の海や産業、食に直に触れることで地域の魅力を感じ、この地域に誇りをもち、地域の発展を考え、行動しようとする意欲を育てる。

③地域・専門機関との連携と人材活用の推進

児童の探究心に応じた深まりのある学習を展開するために、地域の漁業関係者や大学等の専門機関と連携する。

＜主な連携先＞

- ・東京大学海洋ライアンス海洋教育促進研究センター
- ・宮城県北部鯉鮭協同組合
- ・気仙沼市水産課、観光課
- ・岡本製氷
- ・サイシン商店
- ・海友会
- ・気仙沼観光協会
- ・海の市
- ・藤田製函店

(2) 活動で育む能力・態度

【重視する価値】

- 多様性……海には、多様な生き物が存在する。地域には、水産業に関連する様々な仕事がある。
- 相互性……地域の人々は、海辺の環境を生かし、互いに連携しながら地域を支えている。
- 連携性……海との関わりを考え、自分たちが「海と生きる」ためにできることを工夫する。

【培いたい資質・能力】

- 専門家の意見や地域の情報をよく検討・理解して取り入れ、水産業のあり方を自分なりに考える。（批判的に考える力）
- 海の環境と産業、産業と食など、様々なものごと

を関連付けて考える。（多面的・総合的に考える力）

- 自分の考えを簡潔に分かりやすくまとめ、地域や交流校の人に伝える。（コミュニケーションを行う力）
- 自分が様々なものごととつながっていることに関心もち、感謝の気持ちをもって生活しようとする。（つながりを尊重する態度）
- 健全な食生活を送るために基礎的な知識を身に付け、健全な食生活を実現しようとする。（健康づくりに取り組む意識・態度）
- 自分の言動に責任もち、地域のために進んで行動しようとする。（進んで行動する態度）

(3) 活動計画

学習の目標	学習の過程	学習の成果
「海と生きる」の魅力を学び、地域や産業、食に関心をもつ。	「海と生きる」の魅力を学び、地域や産業、食に関心をもつ。	「海と生きる」の魅力を学び、地域や産業、食に関心をもつ。

(4) 活動の実際

事前の共通体験

- 東日本大震災後、海で遊ぶ体験が減ってきており、海を身近なものにとらえられない児童もいる。海に関心をもたせ、課題づくりに結びつけるために、磯観察や塩作り等の共通体験の場を設定した。



＜磯観察＞

＜浜風を利用した凧揚げ＞



＜塩づくり体験＞

第1次「みなとまち調査隊」

- 地域の環境や水産業の実情を知るために、地元

の新聞を活用した。導入で活用するとともに、継続してスクラップ活動を行うことで、水産業への関心や理解を高めることができた。



<活用した地元紙「三陸新報」の記事>

○気仙沼の水産業を支える仕組みを探るために、気仙沼魚市場と気仙沼湾周辺にある水産関連施設を訪問し、インタビュー活動を設定した。分かったことは、新聞形式でまとめさせた。



<気仙沼魚市場見学>



<水産関連施設見学・コース別調べ学習の様子>

第2次「海の恵み調査隊①」

○漁の工夫や船員の苦勞、資源保護の努力等を知らせるために、遠洋マグロ船の見学と船員へのインタビューを行った。



<マグロ船内を見学する児童>



<船主と船長から資源保護についての講話を聞く>

○三陸沖の潮目を再現する専門家による実験を交えた授業で、三陸沖の豊かさの秘密について学んだ。児童は、気仙沼魚市場に多様な魚が水揚げされる理由を知るとともに命をはぐくむ海を守りたいという思いをもった。



<東京大学海洋アライアンス 海洋教育促進研究センター・丹羽 淑博先生の特別授業>



<「三陸の豊かな海」についてまとめた児童のノート>

○5年家庭科「3つの食品のグループとそのはたらき」で、魚の栄養に関する学習を行った。児童は、ネスレ ヘルシーキッズ プログラムの栄養プログラムを活用し、カルシウムの大切さを学んだ。児童は、魚介類にカルシウムが豊富に含まれていることを知り、その後の調理実習では、「Caたっぷり 煮干しまるごとみそ汁」と題して、だし用煮干しを途中で取らずに具として食べる工夫や小魚をおやつとして食べる工夫を行っていた。



<カードを使って栄養を学ぶ児童>

児童の感想

- ・骨を強くするためには、カルシウムとたんぱく質が大切なことがわかりました。牛乳以外にも小魚にカルシウムが含まれていることがわかったので、これからは、どんどん食べたいです。
- ・私は、これまで魚の骨は苦手でしたが、これからは、わかぎのフライなどは、残さず丸ごと全部食べます。丈夫な骨にするためには、食べるだけではだめなので、昼休みには、たくさん外で遊びたいです。
- ・煮干しには、カルシウムが含まれているので、これからは、全部食べます。家族にも伝えて、みんなで丈夫な骨を作りたいと思います。

○気仙沼魚市場に水揚げされる魚を使った「気仙沼らしい新しい丼ぶり」を考え、親子で試作し、味わった。調理の前には、これまでの水産業に関する学習の様子を紹介したり、宮城県北部鯉鮪協同組合職員による水産業に関する講話を聞いたり、親子で漁業に対する理解を深めた。



<親子で魚を調理>

<児童が考えた気仙沼丼>



<「親子料理教室」三陸新報記事>

親子料理教室参加者の感想

- ・魚は、扱い方が難しく、高いのであまり食べませんでした。魚の栄養価を知ったので、家庭でも積極的に取り入れたいと思います。(保護者)
- ・気仙沼に住んでいるながら、魚がどのようにして獲られているのか、考えたことがありませんでした。これからは、魚を食べる際に、漁師さんの顔を思い浮かべ、感謝して食べたいと思います。(保護者)
- ・親子でごうかな海鮮丼を作って楽しかったです。私たちが学習していることをわかってもらえてうれしいです。(児童)

第3次「海の恵み調査隊②」

児童は、地域の浜でワカメの種挟みから収穫、塩蔵までの一連の流れを体験した。ワカメ養殖に携わる方から、海辺の環境が震災前のように戻つつあることを聞き、地域の水産業の復興を願う強い気持ちをもつことができた。また、ワカメが育つには、栄養分を運ぶ川が大事であることを

教わり、これまで学習を続けてきた山・川・里・海のつながりや面瀬川の環境を守ることの大切さを再認識することができた。



<ワカメの養殖体験>

<生産者の話を聞く>

交流と発信

- 第1次で調査して感じた地域のよさを呼びかけの形にまとめ、「面瀬フェスティバル」と「海洋教育こどもサミットin東北」で、来場者に向けて発表した。
- 第1次、第2次で探究したことをポスターにまとめ、「海洋教育こどもサミットin東北」で代表者が発表した。また、全員で他校の発表を聞き、情報を交換した。3学期には、「気仙沼フォーラム」として、1年間に学んだことや海と生きていくために自分たちにできることは何か考えたことをパネルディスカッションの形で東北の小・中・高および市民に向けて発信した。



<「海と生きる」をテーマに発表 ～面瀬フェスティバル>



<海について学ぶ他校の子どもたちとポスターセッション～海洋教育こどもサミットin東北>

3 成果と課題

(1) 成果

・水産業にかかわる学習を横断的・総合的に単元に組み入れたことで、環境-生産-流通-産業-食-健康という相互のつながりの中で、児童は、自分たちの生活と水産業のかかわりについて考え、豊かな三陸の海の恩恵によって地域の文化や生活が支えられてきたことに気付くことができた。また、活動を通してふるさとのよさに気付き、水産業や周囲の人への感謝の気持ちをもつことができた。

・家庭科の栄養に関する学習、親子料理教室等の取組を通して、児童と保護者は、魚の「食」としての価値に気付き、得られた知識を生活に生かそうという意欲をもつことができた。

・磯観察や塩作りの体験活動は、海の恵みを実感させ、地域の基幹産業としての水産業に目を向けさせるのに効果があった。

・地域・専門機関との連携によるコース別の調べ活動や体験活動を行わせることで学習に広がりが見られた。

・聞き取り調査等の人とのふれあいを通して、コミュニケーションへの意欲が高まった。

(2) 課題

児童は、課題を解決するために体験活動や調べ学習に熱心に取り組み、様々な情報を得ることができた。今後は、集めた情報をとらえ直したり、練り直したりする時間を十分に設定し、主体的な学習がより深まるような指導計画の改善が必要である。

「健康教育」に対する意識と行動に高まりが見られるよう、「食教育」のみならず、運動プログラムと合わせた実践の方策を探るとともに「早寝・早起き・朝ごはん」を含めた基本的な生活習慣の形成を家庭と連携して進めていきたい。

今後も地域と連携しながら教育の質を高めていくことができるよう努力していきたい。

ネスレ日本株式会社



自分のからだは自分でつくる

「ネスレ ヘルシーキッズ プログラム」

1. 取組の背景

栄養不足による乳幼児の死亡率の高さに心を痛めたアンリ・ネスレが、150年前にスイスで安全で栄養価の高い乳幼児用乳製品を開発し、これを販売するための会社を設立しました。それ以来、社会のために価値を創造し、それによって企業にとっての価値も創造する、「共通価値の創造」の考え方が、ネスレの基本的な経営方針になっています。この方針のもと、世界を代表する栄養・健康・ウェルネス企業に成長してきました。そして、現在共通価値を創造する潜在力のある分野として、「農業・地域開発」、「水資源」そして「栄養」の3分野を掲げてさまざまな取組を行っています。

栄養の分野における主要な取組の一つに「ネスレ ヘルシーキッズ プログラム」があります。2009年に開催されたCSV（共通価値の創造）フォーラムにおいて、ネスレスイス本社のポール・ブルケCEO（現会長）が、ネスレが事業を展開するすべての国で、世界の最も複雑な課題である子どもの健康問題に取り組むことを考え、このプログラムを実施することを発表しました。ネスレ ヘルシーキッズ プログラムは政府やNGO、NPOなどの公的機関と協働して、その国や地域の子どもたちが抱える課題を解決するようにオリジナルのプログラムとして開発され、子どもたちの栄養に対する理解を促進し、正しい食生活を促す食育と、十分に体を動かすことの大切さを学んでもらう運動をセットにした取組になっています。2015年までに84カ国で展開され、800万人以上の児童に対して支援をしています。

2. 日本におけるネスレ ヘルシーキッズ プログラム

日本では2011年より、一般社団法人ニュートリション運動推進会議 子どもの健康づくり委員会を

パートナーに、「自分のからだは自分でつくる」をスローガンに掲げて活動しています。

人間の生きる根幹である「食べる」「動く」「休む」ことの大切さを小学生に伝えることにより、「自分のからだは自分でつくる」という自己管理意識と能力が身に付き、それによって生涯にわたって健康な体と望ましい生活習慣を自分のものとし、「自信」が持てる子どもが育つことにつながると考えています。

ネスレ日本は、子どもが成長する過程において「からだづくり」に自ら関心を持ち、さらに、仲間とともにその喜びや楽しさを分かち合うことによって、心身豊かに成長することを願い、「ネスレ ヘルシーキッズ憲章」を定めています。

ネスレ ヘルシーキッズ憲章

1. 「自分のからだは自分でつくる」という、からだづくりに対して前向きな子どもを育てます。
 - 「巧みに運動する身体能力」
 - 「健康・安全に生きるための身体能力」
 - 「社会生活において必要な身体能力」
2. <<運動>>と<<栄養>>を組み合わせた「からだづくり」に取り組みます。
3. 「社会性」や「対人関係能力」、「他者への思いやり」を育てます。

3. ネスレ日本ヘルシーキッズ賞

持続可能な社会の担い手となる子どもたちの健やかな成長への共感から、ESD大賞の枠組みの一つとして、ネスレ日本ヘルシーキッズ賞を設けました。

ネスレ日本ヘルシーキッズ賞では、特に4つの観点から、子どもの意識・行動変容につながっている優れた事例に対して賞を贈ります。

- ① 食育（栄養、食生活）と運動の両面で「からだづくりに前向きな子どもを育てている
 - ② 仲間と共に行動することで喜びや楽しさを分かち合うことができる
 - ③ 「社会性」や「対人関係能力」、「他者への思いやり」を育てる
 - ④ 子どもの自尊感情、自己肯定感を高める
- 2016年には、2015年度受賞校の本室蘭小学校を訪問しました。具体的な取組事例についてヒアリングを行い、ネスレ ヘルシーキッズ プログラムの改善にも役立っています。

4. 基本の活動

～小学校を対象とした無償教材提供～

食育に使える栄養プログラム教材と、体育や学活で使える運動プログラム教材をセットにして、無償で提供しています。

●特徴

- 学校が抱える課題や児童の習熟度に合わせて組み合わせられるよう、基本教材に加えてテーマ別教材を用意
- 補助教材や栄養辞典、デジタル絵本などをWEBで展開
- 教材ごとに先生のための「教師用手引き」を用意
- 学習指導案や運動プログラム指導者用の動画をWEBで公開

<<栄養プログラム教材>>

① 「げんきのもと」

対象学年：1年生、2年生

楽しいイラストで食べることの意味や必要性を学びます。

食育の授業として、学級活動や総合的な学習の時間、身体測定などの保健指導の時間にご活用いただいています。

② 「からだのもと」

対象学年：3年生、4年生

食べ物のはたらきや栄養バランスを、付録の食材シールを使って楽しく学びます。

3年生の保健領域「毎日の生活と健康」の学習、学級活動や総合的な学習の時間等での食育授業、身体測定などの保健指導の時間にご活用いただいています。

③ 「自分のからだは自分でつくる」

対象学年：4年生、5年生、6年生

丈夫な骨のつくり方と成長期の骨づくりの大切さを学びます。

4年生の保健領域「育ちゆく体とわたし」の学習、学級活動や総合的な学習の時間等での食育授業、身体測定などの保健指導の時間にご活用いただいています。

<<運動プログラム>>

① ヘルシーキッズ鬼ごっこ

「ヘルシーキッズ鬼ごっこ」は、日本の子どもたちのために開発したオリジナルの運動プログラムです。鬼ごっこに食育学習の要素（栄養の3色分類）を取り入れることで、栄養と運動によるからだづくりを意識できます。

子どもたちが鬼ごっこを遊びとして楽しむことは、全身を動かし、自然とからだづくりにつながります。同時に単なる遊びにとどまらず、基礎的なものから応用までの習得状況に応じた運動プログラムにすることで、身体能力の向上を図ることになります。それとともに、クラスや仲間の状況を考えながらみんなが楽しめるルールを考え、まわりとのコミュニケーション、思いやりなども学ぶことが期待できます。また、栄養プログラムで学んだことを復習するような内容にもなっています。

- ヘルシーキッズじゃんけん鬼ごっこ
- ヘルシーキッズ問答鬼ごっこ
- ヘルシーキッズ宝あつめ鬼ごっこ



② ヘルシーキッズBRTプログラム

「ヘルシーキッズBRTプログラム」は、限られたスペースでも、1人や少ない人数でも取り組める、小学生の時期に有効な運動（トレーニング）として開発されました。

「BRT」は「Balance（バランス）」「Rhythm（リズム）」「Timing（タイミング）」の頭文字をとった名称で、これらの要素は児童期における正しい姿勢づくりとからだの動かし方の基礎となります。「B」「R」「T」それぞれ要素別に段階的な運動が組み込まれています。

- Bバランス：スピニング（回転運動）
- Rリズム：ホッピング（連続跳躍運動）
- Tタイミング：ジャンケン（瞬発運動）



③ ヘルシーキッズ健康卓球

「ヘルシーキッズ健康卓球」は、子どもの健康づくりには、学校・地域・家庭の連携が必要であるとの考えから、地域コミュニティーでの世代間の交流も可能にする取組として開発されました。

ゲームには栄養の知識を取り入れることで、運動しながら栄養のことも学べる工夫がされています。また、教材をWEBで公開することで、地域コミュニティーの活性化を推進する地方自治体や団体との連携した取組も目指します。

5. プログラムの効果検証

ネスレ ヘルシーキッズ プログラムでは、活動が児童にどのような影響を与えているか、モニター校の協力を得て検証を行い、その結果を関連する学会などで発表しています。

6. 教材を利用された小学校の先生の声

実際に教材を利用した小学校の先生からの声をいくつか紹介します。

- テキストがかわいく、子どもたちの興味をひきました。低学年の内容は難しすぎず、栄養に対する初歩の導入にはぴったりだと思います。ここをスタートに自分の体と食について考えるきっかけになるといいと思いました。（栄養士）
- 学校でのプリントはカラーを使うことがめったにないのでありがたいです。（食育担当）
- 「からだのもと」はシールを使用するので、児童自ら赤黄緑に貼り、目と手が使え記憶に残りやすく、大変助かります。（養護教諭）
- ポスターが良かった。印刷しなくても授業ができた。シールがあり児童も活発に学習ができた。（担任・体育主任）
- 学年に合った教材なので発達段階に合った学習ができた。（養護教諭）
- 食育だけでなく楽しく運動するという視点が素晴らしいと思いました。運動は仲間作りにもなり、心も健康になります。（担任）
- 教師用手引きと児童用資料がセットでいただけなので、準備に時間がかからず、すぐに取り組めるため大変助かっています。（養護教諭）
- 素材が充実していて、教師用手引きや資料が豊富で指導を行う上でたすかりました。指導後、教室でも話題になるなど、子どもにも職員にも好評でした。（養護教諭）

<問い合わせ先>

一般社団法人ニュートリション運動推進会議子どもの健康づくり委員会

TEL：03-3541-6362

（土日祝日を除く10：00～17：00）

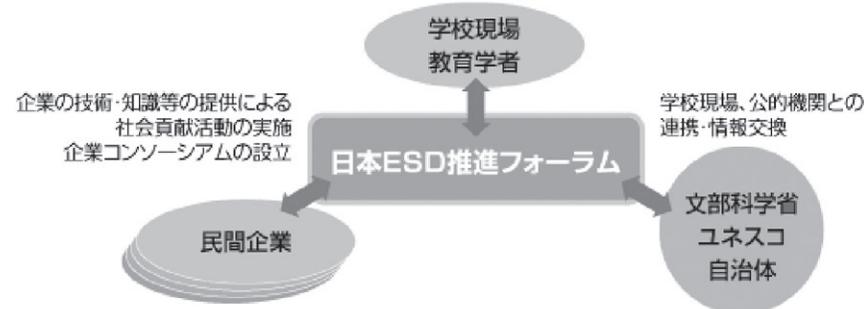
Eメール：info@ugoku-taberu.com

URL：http://www.ugoku-taberu.com

NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムについて

NPO 法人日本持続発展教育 (ESD) 推進フォーラムは、発想豊かで、柔軟性に富んだ早い時期から、ESD を取り入れることが大切だと考え、持続可能な社会を担う人として、具体的なビジョンを持った子どもの育成を目指し、2009 年 5 月に発足いたしました。

「社会の担い手を育てるため、ESD を教育現場へ推進する」という共通の目標のもとに、産・官・学が共同するための橋渡し役となって活動しています。



主な活動

■教育関係者へ向けた活動

学校教育の現場で ESD を普及していくため、主に教員を対象にした研修会等を全国各地で開催します。

■ユネスコスクールの普及

ユネスコスクールの目指す研究テーマと ESD のテーマが一致していることから、文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールを ESD の推進拠点として位置づけ、加盟校の増加に取り組んでいます。当 NPO でもその活動をサポートしています。

■社会全体で子どもを育てる仕組みづくり

企業や自治体・団体等の力で『持続可能な社会づくりと担い手』をどのように育成していくか考え、実行していきます。

■ユネスコスクール全国大会 持続可能な開発のための教育 (ESD) 研究大会 の実施

ユネスコスクール、教育関係者、自治体・団体、企業関係者が ESD の実践研究について相互交流を図るとともに、日本における ESD の普及・発展を考える研修会を開催しています。

■ESD 大賞

ESD を実践している、全国の小中高等学校の中から優れた活動に対し、ESD 大賞を贈ります。

■ホームページを通じた情報提供

ESD の実践紹介など、最新の学校現場の状況をお伝えしていきます。企業や団体・自治体などが制作した ESD の趣旨に合う教材を集めたネットライブラリを開設しています。

(NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム ホームページ: <http://www.jp-esd.org>)

ぜひ ホームページをご覧ください!

ESD (Education For Sustainable Development) は、未来のよき消費者、よき従業者、そして持続可能な社会の担い手を育てる教育です。

Facebookでも近況報告を行っています!



NPO法人 日本持続発展教育(ESD)推進フォーラム

HOME お知らせ ユネスコスクール全国大会 ESD研究大会 ESD大賞

すべての教育は 持続可能な社会の構築のために

フォーラムについて
当フォーラムの活動計画や ESD関連サイトのご紹介。

ESD研究大会
ESD研究大会の詳細や参加申込の最新情報。

ESD大賞
ESD大賞の詳細や応募方法の最新情報。

ESDライブラリ
ESDに関連する各企業の教材などのご紹介とダウンロード。

日本持続発展教育推進フォーラムは、すべての教科・領域におけるESDの実践を目指します。

小中高校など学校教育の現場でESDを普及していくため、政府や自治体、ユネスコなど公的機関や民間企業・団体との連携を広げ、ESD普及に必要な人材や各種教材の開発・提供、事例発表などを推進していく公益団体です。

当フォーラムの活動について

ユネスコスクール全国大会

年に1回、ユネスコスクール全国大会を開催しています。全国から学校教員や行政、企業、団体を含むESD関係者が集まります。

ESD大賞

全国の小・中・高校からすぐれたESDの取り組みを募集し、表彰しています。

ESDライブラリ

企業が提供するESDの教材や出前授業の普及協力を行っています。HPでも水・エネルギー・環境・暮らし・食・健康・人権などをテーマとするESDプログラムの紹介をしています。

NPO法人 日本持続発展教育(ESD)推進フォーラム

<http://www.jp-esd.org/> ESD推進フォーラム 検索

第7回ESD大賞
受賞校実践集

発行日：平成29年3月14日

発行：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

<http://www.jp-esd.org>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-40

Tel：03-3295-7051

Fax：03-3295-7054

E-mail：info@jp-esd.org